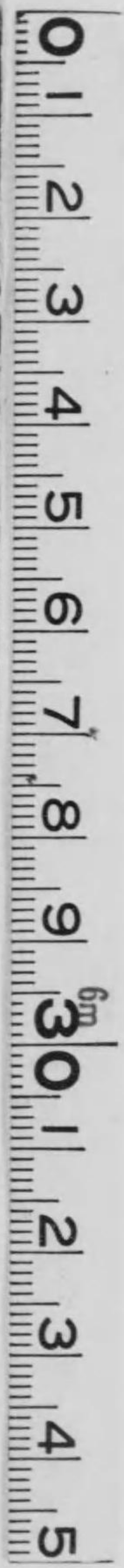


365
Mo55
⑦



始



4-2321
い

~~503757~~

365
M055

(3)



法学博士
フク
イロ
ソル
フイ
イ

森本厚吉

新生活研究

東京文化
生活研究會

大正
12.6.18
購求

GETTING A LIVING

A STUDY OF
THE PRESENT DAY PROBLEMS OF GETTING A LIVING
THE EVOLUTION OF ECONOMIC LIFE
THE NATIONAL FOOD PROBLEMS

BY

KOKICHI MORIMOTO, Ph.D. (JOHNS HOPKINS
UNIVERSITY)
PROFESSOR OF ECONOMICS
THE HOKKAIDO IMPERIAL UNIVERSITY, JAPAN

AUTHOR OF

"THE STANDARD OF LIVING IN JAPAN" (ENGLISH), 1918
"A STUDY OF PROBLEMS OF LIVING" 1919
"EFFICIENCY OF ECONOMIC LIFE" 1920
"PRINCIPLES OF ECONOMIC CONSUMPTION" 1921
"FROM EXISTING TO LIVING" 1921
ETC., ETC.

BUNKASEIKATSU-KENKYUKWAI

(PUBLISHER)

GINZA, TOKYO, JAPAN

1922

序

人其者が文化の本尊であるのに、自分達の造つた文明が、今日却て人を機械同様に取扱つて、新時代に生を受けた人々が當然樂しき得べき文化生活を営み得ないといふ眼前の事實は何といふ惨めなことであらう。

如何に我國が世界五大強國の一つとして誇つて居ても、文化の恩恵は未だ民衆に及ばず、單に少數の特殊階級者や富豪に専用されて居るのみで、同胞の大多數は、持つて生

れた生活権さへ、自由に行使し得ないではないか。

勿論國家萬能主義とか、資本主義とか、軍國主義などで築き上げた文明が、かくの如き現象を伴ふといふ事は、明かに先哲が教へて置いた事で、何も今更不思議がる必要はない。

唯當面の問題として、私共が現代社會の真相を研究すると、すればするほど、個人及び社會生活を新時代に適應するやうに改造して、正義と人道の上に、新文化を建設し、以て『最大多數者の最大幸福』を精神的及び物質的に實現する事が、刻下の急務であること心から感ぜずには居られな

い。

かゝる改造の基調は、言ふまでもなく、個人としては、根本的に其生活を現代の進歩した科學の立場から觀て、合理的及び經濟的と認め得るべきものに改め、社會としては、其組織や制度を眞に民衆の意志の表現であるものとしなければならぬ。

これが爲めには、今一層教育の普及を圖り、民衆の啓發に最善を盡し、彼等をして、平等なる人格の尊重と其責任觀念とを充分に自覺せしめ、新知識を實生活に應用して、能率の高い以て生活を營み得るやうに努力しなければなら

ないのである。

かくの如き改造運動が行はるゝ時に、識者の注意を要する事は、所謂ブルジョア文化と、プロレタリア文化とは、到底協調され得べきものでないから、舊時代が新時代に變遷するに當り、自然何等かの闘争が起り、一種の破壊を見なければならぬであらうといふ事である。

恰も卵の殻が破壊されて雛が生れ出づるが如くに。一般民衆の生を厚くし得る一段高い文化を建設するが爲めには、情實、因襲等色々の古い思想に囚はれた文物は、卵殻の如く總べて破壊され葬り去られなければならぬ。

けれども、それらの避くべからざる闘争や破壊の裏には、必ず平和や建設の光明が輝いて居らねばならぬ。私共が、たとへ、一部社會主義者から生ま温いこの批評を受けても、常に健實な建設的行動をとりて着々文化運動の進捗を計らんとするのは蓋し之が爲である。

私共學徒として、専心眞理の研究に従事し得る者の有する特権の一は眞理を探究して眞正の自由を理解する事である。この自由の與ふる偉大なる力と、現代文化の缺陷とを自覺する私共が、此の際振ひ起たないといふのは、餘りに卑怯な事であらう。

この故に微力を顧慮する暇なく、虐げられた人道の爲め、
又弱き正者の爲めに、偽らざる眞理の示す訴を世になさん
として、最近一ケ年間に研究したものを集めて、此の書が
公刊さるゝに至つたのである。

六

一九二二・六・一

森 本 厚 吉

序

前篇 生活叢論

- 一 呪ふべき二つの生活……………一
- 二 文化生活の第二思想……………一二
- 三 誤まれる生活論……………一六
- 四 今日の人……………二八
- 五 物的文化生活論……………三一
- 六 自由の生活……………六三
- 七 生の經濟と死の經濟……………六八

八	結婚の改造……………	九五
九	結婚生活の悲哀と産兒制限……………	一三三
一〇	女性美と社會美……………	一六一
一一	看過された經濟原理……………	一八〇
一二	新年と自己の能率調べ……………	一九一
一三	現代文化と勞働爭議……………	二〇〇
中篇 生活進化の研究		
一	總論……………	二三七
二	人の世になる迄……………	二四七
✓三	自然生活から經濟生活へ……………	二五七
四	經濟生活の現出……………	二七二

五	自然と人の鬭争……………	二八一
六	奮闘生活の武具……………	二九五
七	機械の世から平和生活へ……………	三〇九
八	生き方の進化……………	三二五

後篇 國民食糧の研究

一	緒論……………	三三九
二	國民食糧問題の起因……………	三四三
三	食糧問題の發達(食料品の騰貴)……………	三四八
四	食糧問題の發達(人の價值増加)……………	三五一
五	食物消費に關する僻見……………	三五三
六	食糧問題と榮養問題……………	三五六

七 國民食糧の調査……………	三六二
八 北海道民食糧の研究……………	三七三
九 農民食糧の調査……………	三八〇
一〇 英米國民食糧……………	三九六
一一 日本國民食糧の特徴……………	四〇〇
一二 國民食糧と營養問題……………	四〇五
一三 營養の基礎觀念……………	四一一
一四 日本國民の營養……………	四二六
一五 日本國民食糧の危險性……………	四三五

前篇 生活叢論

一 呪ふべき二つの生活

一 愛國と生活問題

自國の長と他國の短を數へ舉げて之を吹聴する事は、凡人の自負心を満足させ得るのであるから、語る方も聴く方も共に一種の愉快を感じるものである。而して世間では斯かる人々を愛國者と呼ぶのが常であるが故に、私は寧ろ非愛國者呼はりされるのを光榮として、其反對に自國の短と他國の長を語り、常に自己と同胞とに苦

がい刺激を與へ、以て生活の向上を計り眞に幸福な新社會を建設したのである。

我國民生活には勿論長所もあるが、著しく變化した現代の經濟生活としては餘りに多くの短所を有して居る。今日世界の日本として國際的に活躍するに當り、先づ我國民が自己の生活に於ける精神的及物質的欠陥を自覺して、是を新時代に適する

ものに改むる事が——如何に語る者にも聴く者にも不快の業であつても——根本的に必要な事である。眞に國を愛する人は其努力を吝んではならぬ。

抑我國の現代經濟生活に就て世界的考察を下す時には、歐米先進國に比して數十年又は百年以上も時代後れになつて居ると云ふ議論は必しも空論でなく、幾多の實例が是を證明して居る。然るに徒らに我文明を自讃し大和民族のみが特に天惠を享けて居るが如く考ふるのは。世界進化の理法を無視するもので、結局我國を破滅せしむるものであると信ずる。

文藝復興時代に入つてから著しく學術が進歩し、新しく知られた學理が盛に應用され、廿世紀に入りて未曾有の經濟進歩を見るに至つたのは是皆學問の賜である。然るに其偉大なる力を有して居る學理の適用が社會の本體であり又經濟の主體である人其物の實生活には及ぼされないうで、今猶習慣の惰性に盲従し、因襲に囚はれた不合理な生活に安んじて居るのは不思議な事である。當然の結果として現代生活に

種々の缺陷を生じ、今日の經濟社會で決して存在を許す可からざるものでありながら、盛んに營まれて居る生活を先づ二つ挙げなければならぬ。即ち、一は奢侈生活で二は所謂簡易生活である。是實に呪ふ可き生活であつて文化の開發の爲めに私共は全力を盡して打破しなければならぬのである。

二 奢侈生活打破

文化生活は一種のハイカラな奢侈生活である如くに考へる者があるのは大なる誤りである。事實は全く反對で、奢侈生活は文化生活の大敵である。若し生活に奢侈が行はるゝに至つた時には文化生活は破られて居るのである。而して所謂文化生活運動と云ふ可きものには、物質的精神的兩方面に生活を向上すると同時に、其生活を單に小數者に限らないで社會大多數者である民衆に及ぼさんとするのが主眼である事を思へば、小數者の奢侈生活の如きは今日其存在を許す理由が無いのである。現今の如く物價の騰貴した時に能率の高い生活を營むには、東京なれば一家五人

暮しで月収二百圓乃至三百圓を最小限度として必要とするのであるが、夫だけの所得を得て居る家族は我國では極小數である。併も我國全體から考へると近來富の増加實に驚く可きものがあるに拘らず、依然として文化生活を送り得ない人々が數多いのである。資本主義が勢力を占めて居る現代經濟界では少數の資産家は勞せずして富の増殖を得るのであるが、無産階級に屬する者は終日苦役に従事しても生活の資料さへ得る事が出来ない、即ち富める者は益々富み貧しき者は其持てる物さへ奪はるゝのが常である。實に現代は經濟壓迫の強いせち辛い世の中である。

現代社會生活は舊式の家長家族生活其儘である。即ち主人のみは待合通ひをして贅澤三昧に暮して居るが、家族の者は生活權さへ自由に行使されず、苦しい惨めな生活を營んで居る、同一家族の者であるならば苦樂共にデモクラチックに分配さる可きであるから、主人の浪費を省いて一家全體の幸福増進を企圖するのは當然の事ではあるまいか。夫と同様に少數者である富豪は假令自分の爲には必要がなくとも社

會の幸福の爲自らを戒め、奢侈生活を文化生活に改め浪費を省くと同時に自己の能率を高めるのは現代人の當然の義務である。斯くする事により一は富の利用を大にし、二は有害及奢侈消費の目的物生産の爲に費す勞力を有用化し得る事が出来る。故に結局文化生活を民衆に及ぼし得る機會を大にする事になる。民本主義の重きをなす今日に於ては最早特別の特權階級が勞せずして奢侈生活を營み社會の進歩を害するが如きは許す可からざるの罪惡ではあるまいか。かゝる不法な生活を打破する事は文化の開發の爲に大いに益ある事である。

三 奢侈生活の本體

奢侈生活退治を行ふに當り先づ奢侈の意義を明かにしなければならぬ。而して奢侈は普通には富豪の專有物であるかの如く考へて居る、勿論、彼等の奢侈生活は最もよく目立つもので、其弊害も最大であるが、中流者にも貧民にも亦奢侈生活が行はれて居る事を記憶せねばならぬ。

奢侈に關する解釋は種々ある、例へばセーは「稀少にして高價な物の使用」と云ひ、ラベレーは「高價にして贅な物」の使用と云ひ、イリーは「奢侈は消費者には必ずしも直接に有害な消費ではないが其物又は其勤勞の消費の結果として消費者が社會に返す事が出来る勤勞に比して著しく不釣合なる物によりて成り立つ」と云つて居る。要するに奢侈の特性は第一其物自身は必ずしも有害ではないが、其特定の消費者に對して直接又は間接に必ず害あるものである、第二に奢侈には二種の著しい不釣合が存在して居る、即ち第一の不釣合は消費者の富力と奢侈に費す經費との間に存在して居る。例へば現在の我國で中産以下の者が自動車に所有する事は、其富力と自動車の使用の間に著しい不釣合があるから自動車其物は有益であるが其消費は奢侈である。第二の不釣合は奢侈に費す經費と其慾望満足の程度の間に著しい不釣合がある、例へば流行を追ふ高價な美服、或は高價にして滋養價値の少い珍奇な食品、或は過度の飲酒、喫煙等の如き皆奢侈に屬するものである。故に奢侈とは其

物の性質によつて決定されるのでなくして其物の使用者の如何により或は必需品となり或は奢侈品となるのである。従つて奢侈が一度社會化するゝと奢侈が文化生活に必要なるものになる場合も少くない。

四 簡易生活打破

奢侈生活は文化生活の敵であると同様に原始的簡易生活も亦社會進化の爲に打破しなければならぬものである。如何となれば此生活は單純な原始生活又安價生活と同一類のもので出来るだけ生活を原始的にして其生計費を節約せん事に努め、生活の内容又は能率等には注意を拂ふ事が少いのである。單に生きて居ると云ふのが生活の目的でなくして役立つ生活即ち有益な生活を送る必要がある以上は、今日知られて居る科學の示す眞理に基づいて合理的な生活を送らねばならぬのであるから、簡易生活では到底其目的を達し得ないのである。奢侈を許さない文化生活は出来るだけ無駄を省いて、能率の増進を害しない範圍で生活の單純化を計るのであるが此

意味に於ける簡易生活であるならば是を富豪に鼓吹す可きもので、生活に餘裕のない中流以下の者に説くのは却て害を及ぼすのである、簡易生活によつて一時的に起る生計費の節約を重視して一生涯を通じて起る莫大な空費を起す事を輕視するのは、實に大なる誤りと云はねばならぬ。

五 文化生活運動

現代人として當然の義務は、個人的には其心的及び物的生活に於て、最新學理の示すがまゝに合理的に生活行爲を進歩改良せしめて、浪費のない、文化生活を自ら實行して各自の生活能率を大にする事である。社會的にはかゝる生活を民衆が營み得る様に社會の組織を改造する事である。

我國に比して富力の數倍して居る米國に於てすら、「浪費の經濟」と云ふ事が今日盛に論究されて、以て一般國民生活の標準を高くせんが爲に力が惜まれて居ない。商務大臣フーバーの提唱にかゝる、産業擾亂、失業、不適者就業、組織の不統一、

製品の無標準、不當管理法等より生ずる莫大の浪費を省かんとする運動は今や産業界で眞面目に講究されて居る。又國民一般の幸福の爲には飲酒の如き奢侈は國法を以て之を禁じ、最近には「ニコチン、ネキスト」(次に烟草退治)の運動さへ開始されんとして居る。勿論かゝる運動は事情を異にした我國に於ては深く考慮を要するものであるが、凡ての浪費を生活から除去して國民生活の標準を高めんとする其精神は大に學ぶべきである。

我國は歐米文明國の中で世界一の貧乏國でありながら、國家としては國費總額の四割八分七厘を生産的な軍事費に用いて居るが如き一種の國家的奢侈を始めとし、社會としても、個人としても、種々の浪費が社會の各階級に行はれて居る。其結果國民の大多數は豚の様な生活をして居ても、社會に待合其他の浪費機關は仲々に完備され、個人は或は飲酒に耽けつたり、無意味な衣服に費を盡したり、盛んに活動すべき勤務時間の中でも、茶を飲んだり煙草をふかしたりする一種の奢侈生活が行

はれて、金と時の浪費が甚しく爲されて居つても、平然たるものである。然かも時々祭騒をして、夫れ民力涵養とか、夫れ時間勵行とか種々の所謂文化的宣傳に自動車は飛ばされて居るが、其宣傳者自身は頗る非文化的生活を營んで居る其厚顔な有様には驚かざるを得ない。

彼等の多数は、我國及び各自の經濟能力に不釣合極る、二重生活や、飲酒や、喫煙や、藝者遊や、種々の奢侈に屬する行爲を行ふて、却つて得意であり、然かも生活改善を叫んだり、社會改造を高唱したりして居るのは眞に恥すべき事ではあるまいか。

文化生活は絶へず自己の弱點や社會の缺點と戰ふて向上すべき、奮闘連鎖の生活である。而して文化生活運動の本體は一種の奉仕事業に過ぎないのである。故にかゝる生活や運動には、苦痛があり、犠牲が伴ふのが常である、が心的及び物的文化生活を營む事に依りて始めて、其苦痛や犠牲を美化し得る精力が與へらるのである。

斯の如く考へ來ると讀むべきは努力主義に依る文化生活であつて、呪ふべきは逸樂主義で支配さるゝ奢侈生活と生活能力を萎縮せしむる簡易生活とである。

二 文化生活の第二思想

見よ！ 醜しい綱紀の廢頹、風紀の紊亂を。大正の聖代に百鬼續出して文化の生血を吸ふて居るではないか。國民の模範階級に近く起つた事だけでさへ、東京府市の疑獄、滿鐵最高幹部の収賄、大學教授助教の卑賤な婦人關係等を筆頭に大小數へ擧げれば殆んど際限がない。

然かも政府當局は深く之を怪まず、社會も亦大喝して之れを責むる勇なきは、蓋し國民の良心の痲痺して道義心の低級なるを曝露して居るが爲であらう。嘆かはしき事である。

心的文化生活の骨子であるべき正義人道が、かくまで地におちて顧られない現代社會であるのに、文化主義の哲理を誇學的に宣傳したり、或は實生活に於ける食、

衣、住、社交等を改善した位で、文化生活を營んで居ると思ふものが少くない。勿論これ等も必要な行程ではあるが、眞に現代文化に生くる生活は、そんな淺薄なものではない。先づ根本義として各自進んで個人生活の動機を改造する事に最善の努力を盡し、以て道德的改造の實を自ら擧げ得るやうにする事が先決問題である。「人若し自己の魂を失はば全世界を得るとも何の益あらんや」である。

願れば我國も大戰後漸く「世界の日本」となつて、國際的舞臺に躍出すやうになつた。そして始めて氣がついて驚いた事は、幾百年來我誇りであつた大和民族の文明も、世界文化に比較すると、幾多の缺陷が存在して居るといふ事實であつた。夫れがために後ればせながら、先年來各方面に改造問題が提唱されたのは眞に慶賀すべき事であつたが、物事に厭易き我國民性の短所は又こゝにも現はれ、未だ改造の實が擧つたといふでもないに、早やその改造論がぼつ／＼下火にならうとして居るのを私は深く悲しむのである。

かゝる時に當つて取残されて居る重要問題の内、少くとも動機ドウキの改造カウゾウといふ事だけは此まゝ葬り去るべきでない事を近來熟々感ずるのである。勿論、經濟的壓迫は非常に強く、且つ未だ精神的方面を取扱ふほどに經濟學は進歩して居ない今日ではあるが、生活の根本問題は、やはり「經濟生活の改造ではなく、其動機の改造である」といふ原理をスマートと共に、私共の「第二の思想」として叫ばざるを得ない。

動機さへ改造し得るならば、自然に道德的改造が行はれて、生活は自然的に向上市得るのである。即ち生活を支へて行く消費は無意味な空費を少なくして、未來の富レクリエーションの造り替を大にし、又利己的消費が社會的消費に進化する。其結果終には經濟生活の本質が奉仕の競争となり、相互的奉仕の無意識的協力が社會の本體となるに至るのである。かくしてこそ初めて眞の文化生活が實現されるのである。

幼稚な現今の經濟學の立場から論議する物的文化生活論は、心物兩面を有して居る眞の文化生活論に入る必要な「第一の思想」に過ぎない事を決して忘れてはなら

ぬ。云ふまでもなく、今日社會はパンに欠乏を感じてゐる。我等は奮闘して民衆に夫れを豊に與へねばならぬが、矢張り人はパンのみにて生くる事は出来るものではない。改造された動機の上のみ美しい完全な文化生活は建設される。だが所謂改造の叫びが聲を潜めんとして居る今日こそ、道德的改造が一層高唱されなければならぬ時である。然りマルクスやリカードと共に、再びラスキンやカーライルに學ばねばならぬ時が來たのである。

三 誤まれる生活論

一

第四十五議會の本舞臺は休會明けと共に花々しく開かれた。時は大正十一年一月二十一日、國際的に軍備は縮少され、四國協約は成立し、國際經濟會議さへ近く開かれんとして、世界平和時代の曙光が漸く輝き始めた一九二二年である。長く／＼私共が渴望して居つた此新しい年の劈頭の議會で高橋總理大臣は新時代の新首相として其經綸抱負を世界に發表す可く、壇上の人となつた。ワシントン會議、對支關係、戰後施設、軍縮餘裕、官紀肅正等の重要問題に亘つて論議された其精神は旺んなものであつた。此混沌たる時代に處して、貧弱な我國の國家經營が如何に困難であるかとよく其演説にも窺はれて當局大官に少からぬ敬意を表せざるを得ないのである。

首相の施政演説に對し政治學上からは是を批判する事は幾多専門學者に譲る事として、私は茲に其經濟論の一端にして黙過する事の出来ない事項に就て少しく論ぜんとするのである。即ち首相が國民生活の標準と其安定に關して論議された事は、私に從來屢々論述したものと全く相反するものであるから、更に是を熟慮す可き責務を感ずるのである。

二

堂々天下を壓するが如き勢でなされた演説の後で、藤村男が物價問題を中心として鋭刀を向けられた質問に對する首相の答辯の中で、國民生活問題に關して次の如く論ぜられたのは、確に我國一部論者の意見を代表して居るものではあるが、不幸にして私は是を時代後れで、非科學的の俗論として排斥しなければならぬのである。而してかゝる生活論の行はれる事は結局我國將來の世界的發達を害する事甚だしきものとして深く憂へざるを得ない。首相が「粗製濫造と云ふが賣れるから差支ない、

國民に購買力ある間は物價は下らない。政府の力で是を左右する事は絶対に出来ない事である」との意味でなされた議論に對しても私は大に疑義を有するのであるが、今は是を問題にしない。唯其物價論に續いて云はれた事即ち

「次に生活程度の論であるが、是も外國に比して我國が決して劣つて居ないと思ふ、否世界を通じて國民が生活の安定を得て居ると云ふ點ではその筆頭に位して居ると斷言して憚らない」(一月廿二日東京日日新聞に據る)

何と言ふても世界經濟通として名高い總理大臣高橋子爵の口から出た言葉であるから、ほんとに我國の生活状態が世界一であるかの様にも思はれて快感を起す人もあらうが、實社會の現状を見ると、矢張生活難に泣いて居る幾多の事實を目撃し、又歐米國民生活に較べて我國の大多數は、人らしい生活を營んで居ると云ふよりは寧ろ豚の様な生存状態から未だに脱して居ない事實を知つて。同情悲憤の涙を禁じ得ないのである。

三

首相の施政演説が世界的で又新時代的であつたのに比して、上述の答辯が——假令大膽で且明確で、或る意味に於て氣持のよい斷定論であつたとは云へ——甚だしく島國的で舊時代的である誹りを免れないのを私は深く悲しむのである。施政演説と答辯に現はれた生活觀が其精神に於て懸隔の莫大なのを見て、ウエツプ其他の學者が言つて居る言葉が又裏書されたのを悲しく思ふのである。即ち日本は不思議な國でその所謂文明は、著しく進歩して居るけれ共其根本である可き個人の生活状態は未だに封建時代同様で英國に比して少なくとも百年は後れて居ると云ふ事である。

首相答辯の論旨は二つに別つ事が出来る。

- 一 日本人の生活標準は米國人に比して決して劣つて居ないと云ふ事。
- 二 日本人は世界で第一に生活の安定を得て居る國民であると云ふ事。

生存と生活の區別を無視する斯かる論旨に對しては今日論議する價值を認めない

のであるが、唯我政府代表者の口から出たものであるが爲めに、更に熟慮する必要を認むるまでの事である。私共が微力ではあるが萬難を排して所謂文化生活運動に従事して居る目的は、要するに夫等二つの問題に對して首相と反對の事實を認めて居るが爲めである。殊に近來我國でも後ればせながら生活問題研究の資料が次第に多く集つて研究の便が開けるに従つて、益々國民大多數の生活の標準を高くして、彼等に生活の安定を與ふる事が刻下の急務である事を認め、其運動の必要である事を一層深く自覺するのである。

四

斯くの如くにして私は不幸にも首相に反對して我國民生活の標準は、歐米先進國に比して甚だしく低いのみならず、生活の安定も彼等程十分に保證されて居ないと斷言する。生活標準低さが爲に我國の乳兒死亡率、一般天死、肺病等の多い事、老衰し易き事、生活能率の著しく劣つて居る事等は文明國に於て其筆頭に位して居る事

實に關しては、既に拙著「生活問題」「生存より生活へ」其他の論著に於て論究したのであるから茲に繰返す必要を認めない。唯最近の大問題となつて居る不景氣又は輸入超過の問題が生活問題と頗る密接な關係を有して居る事に就いて茲に考へたいのである。

顧みるに歐洲大戰の勃發以來約五ヶ年に亘つた經濟界の好景氣が實に盛んであつただけ、夫れだけ激甚な反動が今日起つて居るのは實に止むを得ない事であらう。一昨年好景氣の終つた當時、銀行會社の計畫資本が十億圓以上であつたのが昨年の終り頃は僅かに二億圓に減じて居る一例だけでも、今日我生産業がどれ程萎縮したかと云ふ事を證明して居る。好景氣の時、例へば一昨年三月頃は物價が戦前の三四倍であつた、夫れが今年になつても未だ二三倍の高値である。併かも小賣相場に於ては猶著しく殆ど好景氣時代の相場同様の物さへ少くない。古今未曾有の不景氣に處して居りながら生活費が我國では餘りに低廉にならないと云ふのは實に不思議な

現象と云はねばならぬ。勿論國民の一部のものは斯かる經濟事情によつて不當の利益を占め得るかも知らないが、所謂民衆の生活はかゝる事情の下には安定を得る事が絶対に不可能の事である。

五

首相の言はるゝ様に財界不況の打撃を受けて居る程度は、外見に於て、米國は日本以上のものであらう。最近の報道によつても、米國には今日四百萬人の失業者があつて、破産者の續出する事今日より甚しきは無いと事である。我國は國が小さく富力が弱いから勿論夫程量的に打撃を受けて居ない。失業者の如き米國の二十分の一位のものであらう。けれ共米國では不景氣時代に入ると、國民も政府も協力して物價が下落せんとする自然の勢力にさからはないで、なる可く生活の安定を破らない様に最善を盡したのであつた。夫れで今日多くのものは殆んど戦前の價格に近い程下落して生活費は著しく輕減して居る。我國よりも一層資本家と労働者と接近

して居る米國の事であるから、不景氣に處した場合には事業を縮小する必要を勞働者も理解して居る。夫れで一日に何百何千の職工が快よく職を去つて、平素の貯蓄や失業資金の補助等を受けて生活を支へ、景氣回復の早くなる事を待つて居る有様は實に大國民として見上げたものである。夫れに比して我國の失業者は一錢でも多くの別れ金を得んとして恨みを残して職を去り、物質的及精神的に甚だしい悲境に陥つて居るのは見苦しい次第である。

六

我國では物價が下落す可き時に下落しない結果として茲に輸入超過と云ふ大打撃を受けたのである。而して輸入超過と生活問題とは又密接なる關係を有するもので、結局昨年来輸出が少く輸入が多くなつたと云ふのは我國民の生活標準が低いが爲めに生産能力が不十分であつた事を證明して居ると見なければならぬ。

大正十年の輸入超過額は實に約四億圓である。斯かる状態が長く續くならば、我

國の誇りであつた戦争中に儲けた三十億の金も直ぐ消費し盡すであらう。そして十年度の歳入不足は少くとも三千萬圓であると稱へられ、十一年度の歳入豫算は一億以上の減額である。併かも所得税収入に於て甚しく減じて居るのを見ると國民生産力が如何に減退し同時に購買力が弱くなつた事を明かに示して居るのである。實に今日は我國も沈衰のどん底に達せんとして居るのであるから、世界一に生活の安定を得て居るとか、生活の程度が外國に劣つて居ないと云ふて、國民の自負心を増長させるのは大なる誤である。

七

抑も我國の經濟界に大影響を有する輸入超過と云ふ事實が如何にして起つたか、又如何にして是れを挽回し得るか、今之を國際貿易の原理に照して考へて見たい。普通には輸入超過の一大理由として戦後勞働者の賃銀が高くなつたものと考へられて居る。従つて救濟策としては、矢張昔の様に「チンプレミア廉い勞働」を我國産業の特長とし

て是れで世界經濟戦に勝を占めんと考へるのである。

併し是れは必ずしも正當でない。輸出を大にするには物價が廉くなければならぬのは勿論である。而して物價を廉くするには生産費が少ないと云ふ事は或意味に於て必要な條件である。乍去生産費を廉くする爲めに勞働賃銀を戦前の様に低くしなければならぬと云ふのは大なる誤りである。勞銀の高い國で盛んに輸出を行ひ、勞銀の廉い國で輸入が盛に行はれて居る事實を見るならば、輸入超過は必ずしも其國の勞働賃銀が高い爲に起る現象とは云はれない。

賃銀の大小よりも遙かに輸出入に影響を有するのは勞働の能率如何である。假令勞銀は高くても其勞働の生産能率が大なるが爲めに盛に生産が起る場合には物價は自然に廉くなる可きものである。而して勞働能率を決定する根本條件は二つある。

一、熟練、知識、健康、品性等の人的要素。二、氣候、地味、地勢等の自然的要素。

此等兩者のよろしきを得た時に勞働能率は最高限度に達し得るのである。けれ共

第一の人的要素の發達に伴ふて或程度迄は第二の自然的要素が支配されるのであるから、労働能率を高めるには人的要素の宜しきを得る事が結局一番大切なのである。

若し能力の低い労働者が三日かゝつてなし遂げる仕事を、能力の高い労働者が精巧な機械の助けによつて一日でなし得るとするならば、後者は前者の二倍の賃銀を受けても前者に比して猶一日分だけの生産高を増加し得るのであるから、勞銀は二倍でも生産物の價額は二分の一になり得る可能性を有して居るのである。斯くの如くにして人を高價に、物を廉價にすると云ふのが結局最も大切な經濟標言となつて居る。要之、廉い労働と云ふ事は——勿論程度問題ではあるが——一國經濟の發達を害する甚だしきものである。

斯く論じ來ると輸入超過問題は結局能率問題で其根本義は能率的生活問題即ち文化生活問題に歸着するのである。現今我國の如く不合理で、且つ標準の低い生活を營んで居るものから、能率の高い労働を望む事は木によつて魚を求むると同様であ

るから基本論としては生活の標準を高めて能率的生活を國民の大多數に營ましめ様とする文化生活運動が、通貨縮少、金輸出解禁、組合發達、公設市場等の問題よりも一層重要なのである。要するに我國の生活標準が低いのが爲めに今日の經濟不況が益々悪化せんとし、國民生活は更らに安定を破られんとして居る。かゝる危急なる時期に於て徒らに我國民の生活状態を謳歌して、根本的の救濟策を採らないのは私共の極力非難せざるを得ないのである。

四 今日の人

東天は白み、黎明の鐘は聴ゆ、昨日の『今日』は『昨日』となつて、今日の『今日』が生れ出た。麗はしい曙光に面する心地よさ！ 太陽の輝ける間、私共に活動の歡喜がある。休みなく動く『慈母の地球』の如く、我共も意義ある活動を生命とする『今日の人』でありたい。

正義人道が虐げられ、分配の公正は實現されず、正しい弱者の叫びが顧みられぬ此の社會に生を享けた私共の切な願望は、永へに、『今日の人』となつて、移りゆく時代に有益なる生を楽しみたいことである。

早や太陽は中天に輝き初めた。今は世界平和主義の新時代である。新しくなつた時代の精神を理解し得ない國家が、内には覺醒し始めた民衆の勢力に、外には益々紛糾する國際關係に、斯くまで惱される事のおろかしさ、これみな新しい今日の問題を昨日の頭で解決せんとする矛盾の生んだ悲劇である。世の先覺者や當局までが、いつしか『昨日の人』となつて、『今日の人』にゆき遅れて居る。だから問題はいやが上にも惡化するのみである。

『今日の人』といひ『昨日の人』といふ。何をもちつてこれを分たう。年齢の相違によつてはでない。文化の開發につれて不斷進轉する心的及び物的の生活に自適し得る人は、如何に白髮高齡の老人でも、尊い『今日の人』である。新時代の精神を解せず道義よりも因襲、正義よりも情實、人道よりも利慾にふみ迷ふ非文化的の生活に溺るゝ人は、それが頑強な壯年者であらうとも、すべて『昨日の人』となつて過去に葬り

去られるのである。

けれども現在社會の常識や法律制度には甚だしく時代遅れのものが多い。だから、『昨日の人』が『今日の人』であるかのやうに立ち振舞ふ餘地がないでもない。然かも彼等は、「事勿れ主義」の平易な生活を貪り、眞面目な『今日の人』の言行を非難、束縛して文化の進捗を阻害して居る。憂ふべく齒がゆき事の極みである。

立て『今日の人』！ 同胞を新時代に生かさなために、我等は協力して雄々しく戦はう。民衆は醒めて文化生活に生きる『今日の人』たらんことを要求して歇まなう。今は『昨日の人』が影をひそめて、『今日の人』が活躍すべき時である。

急げ『今日の人』！ 太陽はやがて西の山の端に傾くであらう。

五 物的文化生活論

私の文化生活觀疑義に答ふ

現代文化は精神の發現である。而して其精神は現代人の各種生活に於て頗る複雑に表現されて居る。故に現代に生きる文化生活の真相を究めんには種々の方面から研究を進めなければならぬ。

我國に於て文化とか文化主義とか云ふ様な事が論議されるに至つたのは。獨逸のクルツール論が輸入された事に其の由來を有するであらうが、主として哲學上からの問題として取扱はれ、文化生活と云へば哲學思想の用語としてのみ一般に解されて居つた。従つて哲學者は、文化生活論は自分達の研究の繩張り範圍内で他の専門

家の容喙す可きものでないかの如くに考へて居つたのであらう。

けれ共人類全體が苦心して造り上げた文化は、あらゆる意味で單に一部分の人達のみの専有す可きものではない。各種階級の人が其恩恵を各方面に普く享けてこそ現代文化の價値が發揮されるのであるから、哲學者も經濟學者も政治家も藝術家も宗教家も夫々自己の立場から、文化の真相を究め時代精神が充分に人類生活に表はれる様にしなければならぬ。而して人類生活には心的生活と物的生活との二方面があるから、哲學論としての文化生活論が存在すると同様に、經濟學の見地から文化生活を論究する事は何も不思議な事ではない。而して其結果の一として物的文化生活論が生れ出づるのである。

二

まだ札幌の學校で有島武郎君と共に卒業論文や、専門として居つた農業經濟學等の勉強はそつちのけにして、試験勉強なんかは眼中に置かず、専ら文學や宗教等の

書物を濫讀して居つた頃であつた。宗教上の煩悶に苦しめられた私は、神學、宗教哲學等の研究で信仰の生涯に入らんと努力して居る時に、「針の尖頭に幾つの天の使が止る事が出来るだらうか」と云ふ様な議論が一時神學研究の中心點であるかの如くに重要視されて居る事を讀んだ時、私はつく／＼信仰生活に入る爲めには神學や宗教哲學の研究はあまり役に立つものではない、信仰は決して理論でもなければ思索でもなく、人類に無限の向上心と喜悅とを與ふる一種の魔力であると思つた。夫れから後宗教研究に於ても主として、實行本位のものを選び、パークレーのアポロザイ類のものとか、フォックス、リビングストーン等の傳記等を愛讀し、衣裳哲學の「永遠の眞理」等に甚だしく共鳴する様に精神的變化を受けたのである。

其當時から十數年を経て近年に至つたが又同じ様な變化が起つた事を告白する。夫れは悪しく云へば空想的理想論に近い様な文化主義の人生觀が、文化生活の全部であるかの如くに論ぜられ、著しく時代後れの狀態にある民衆の經濟生活が一向顧

みられないのを見た時に、私は先づ物的文化生活論を叫び其運動を開始するのは、自分達の責任であると云ふ決心を一層強く有する様になつた。

かゝる精神的變化を背景として、此矛盾の多い現代社會から強い刺激を受けた私は、如何にして社會の害惡を除去し人類の幸福を増進し得るかと云ふ問題を眞面目に考へた時に、勿論人類を精神的に救済し靈の糧を與へる事は、凡てに勝つて必要であると信ずるけれ共、かく迄根強く資本主義が行はれて居る現代經濟界に處しては、無産者は生活に絶對必要なバンを得て、現代人として相應の生活を營む事は決して容易ではない。故に精神的に救済すると同時に物質的に民衆生活を向上させる事が必要であると考へた。其結果私は一經濟學徒として、又正義人道擁護者の一員として生活問題を、個人的及社會的に研究せねばならぬ義務を自覺した。斯くの如くにして微力ながら數年來主として消費經濟の研究に力を致す様になつたのである。而して今日其方面に於て學理の示す眞理に照して今迄手のつけられてない實生

活の状態を研究すると、如何にも不合理極まる非科學的事實の多いのに非常に驚くのである。食物、衣服、住宅、社交等皆時代の進歩と歩調を合はして居ない。而して夫等の不完全な時代後れの生活状態が人類社會に及ぼす弊害は、今日經濟活動の盛になつた時代に入つて次第に顯著になり、其歸着する處は短命、無用の病氣、無氣力、無能率等である。

夫れで消費行爲を現代的に改善し、經濟生活も他の生活の諸相と同じく現代文化に適應する状態に迄引き上げる事が根本的に必要である事を深く感じた。斯くして哲學論として純理想論で飾られて居る高遠な文化生活を極卑近な實際問題としての經濟論に引き下げ、主として物的文化生活論をなして、之を民衆生活の實際問題に普及化せんが爲に私共の文化運動は開始され、過去約二個年間其方面に努力を盡したのであるが、今日幸に多數の同志を得て我等の目的は、第一第二と次第に幾分宛實現されて來た事を悦んで居るのである。

斯く云ふものゝ、哲學は原因及び原理の科學であるから、非常に大切な學問であり是によつて人は次第に人としての深みを増し、其見識は擴大される。我等の體験に基づいて常に反省して、事物を唯見たまゝ聞いたまゝにしないで、絶えずホワイ（何故に）ホワット（何か）で詮議立て、終局の眞意を見出すのは哲學であると思ふから、私は其研究の必要を深く認めるものである。殊にデュキイ教授等の唱へて居る實行本位の哲學、プラグマチズムには私は多大の興味を有する者である。けれ共獨逸の理想派の哲學即ち主觀本位で神秘的な哲理に至つては、専門家でない悲さに其深い意義を解し得られない事を表白する。

人類生活に關しても先づ宇宙人類に關して成る可く廣く又深く其意義を知る事が肝要であるから、哲學上から其原理を研究する事が大切である事は勿論であるが、決して夫れが凡てではない。元來人類の生活には、其時代精神の原動力となつて居

る一種の理想を有して、是を實現せんと欲して其處に努力が起る。而して其理想は種々の方面に亘る可きものが綜合されて居るのであるから、其努力の内容は決して單一でない。哲學的に論ず可きものもあれば、經濟的に論ず可きものもある。各方面から、共通の高遠な理想を追究して生活は次第に廣く、深く、高くなり、其處に時代に適する文化生活が現はれ出づるのである。生活を離れて眞の哲學はない。空漠たる實生活に無關係な論議批評に耽るのは文化生活でない。私は決して文化生活を指導原理とは考へない。夫れは人生の理想を實現せんとして時代時代に表現する生活の最も進歩した一状態であると思ふ。斯く考へることに依りても私は物的文化生活の價値は實に大なるものであると思ふ。

四

文化生活に關する哲學論は、相當に早くから學者の注意を惹いて居つた。獨逸式のクルツール（文化）論、英佛式のシビリゼーション（文明）論等が夫々特色を發揮し

て評論界を賑はして居つた。けれ共文化生活のよつて起る理想と、其結果として起る努力の本源である經濟生活は、物質的要素即ち生活資料によつて全ふされるのであるから、生活の實際的半面である物的文化生活も、時代の進歩と共に研究されるのが當然であつた。然るに事實は是れに反して、何等科學的研究が行はれず、生活は非文化的に營まれて居つたのである。夫れで私共は從來とは少し毛色の異つた文化運動を始めねばならぬ立場に立つた。そして遂に他人の繩張り範圍を侵した私は必ず哲學的論者から非難攻撃の的となるであらうと思つて居つたのである。果せる哉此問題に關せる私の議論に對して疑義を發表した人が二三出でた様である。是れ私が始めから覺悟して居つた事で別に深く留意する必要はないのであるが。萬一かゝる反駁論が一部の人にも誤解の種となつてはと思ひ、且又其批評者が其貴重な誌面を私の爲に少からず割いて教へられた好意に對する禮として、左に些か答ふる事にする。

五

「文化主義原論」の著者文學士土田杏村氏は、其一一〇——一二二頁に於て、又雜誌「文化」第二卷第六號に於て「森本博士の文化生活論の價值」との題目で詳細に亘つた批評を公表された。然るに著者の専門が私と異つて居るので時間に餘裕のない私は未だ著者の論著を充分閱讀したのでなく僅かに私に對して非難された部分だけしか讀了したに過ぎないのであるから、積極的に論議する事を避け、單に自動的に私の文化生活觀を一層明かにするが爲めに必要と思ふ點を記述して御答へする事にする。

先づ第一に注意を促す可き事は、著者自身も書いて居らるゝ通り、私の文化生活と著者の文化主義とは殆ど異つて居るのであるから、彼れ是れと比較的に論戰す可きものではないと云ふ事である。「私は私の専門として居る思索の方面から特色のある議論をする方が、より有益であらうと思ふから殊更に、此種の詮議立をする」(文化主義原)と云つて居られるが、そんな詮議立は私の物的文化生活論には何の役に

も立たない。理想主義の文化生活論を哲學界から引き下して、極く現實的な物的文化生活論にしたのが私の今迄の努力であつたのに、夫れを今更再び哲學論に戻して彼れ是れ非難されるのは、私にとつては無意味の事である。初めから經濟的であるとして打ち出して居るものに挑戦されるのは、私から見ると所謂喧嘩せんが爲めの喧嘩で何等文化の開發にも、學術の進歩にも役立たない一種の浪費ではあるまいかと思ふ。申すまでもなく人の論説を批評する事は時には大いに必要であるけれ共、夫れには細心の注意を拂ひ、極く紳士的に、是れをなす可きである。先づ第一に其人の議論を充分秩序的に研究した後でなければ批評する資格がないものと思ふ。單に一二の部分的論文に表はれた思想を他のより大なる思想から分離して彼れ是れ非難するのは輕卒な事であると私は思ふ。著者は「猶博士(森本)の論著の全體に就き詳細なる研究を遂げた上で其意見を發表したいと思つて居つたものであるが云々」(二二頁)と云つて居られながら、夫れに反して長々と獨斷的な批評をされて居るの

を甚だ遺憾に思ふのである。若し今少し私の論著を精讀して下したのであつたならば自然私自身こんな文を草する時間を省く事が出来たのであつたと思ふ。私の經濟論のほんの一部を捉へて心的哲學論と認められてか非難されるのであるから、如何様にも議論立をする事が出来様が、皆論旨の中心點をはづれて居るので學問上の論争たり得ないのを悲しむ。

六

先づ著者は文化とは獨逸語のクルツールであつて、英語のシビリゼーション(文明)でないと思ひ、文化生活と文明生活とは全く異つた意味を有して居ると明白に斷定されて居られるが(二〇八頁)、私は文化生活を論ずる時にそんな問題を詮議立つる哲學的取扱を避けて、文化生活でも文明生活でも差支ないから現代に適應した進歩的の生活を實現せしめたいと云ふ處に重きを置くのである。キゾーが「文明とは極く一般的に解すると野蠻生活に於ける個人的獨立及び無法律に替ふるに社會的秩

序の設立の結果によつて起る、人類の改良された状態を云ふ」と云つて居るのも、アーノルドが「文明とは社會に於ける人類の人道化であり、又人間の眞の法則に就いて人類に満足を與へる事である」と云つてゐるのも、又は所謂クルツル論の立場から論じた自然主義に對する文化主義でも、私には餘り面倒な區別をつける必要はない、従つて私の文化生活は極く簡単なもので單に現代生活モダニライフと云ふ意義でも足りるのである。

私は嘗て次の如く書いた。「文化生活とは是れを一般的に考へると精神的及び物質的に著しく進歩した新時代の文化に順應する國民生活を意味するものである。是れを經濟學上の見地から解釋すると「生活の經濟的標準」又は「生活の能率的標準」を保てるもの、即ち「經濟的生活」又は「能率的生活」と云ふのである。換言すれば現代の進歩した科學の立場から見て、合理的及經濟的と認む可き生活を文化生活と云ふのである。故に此の生活は古い思想や習慣に囚はれないもので、能率多くして樂し

きものである可き筈である」(文化生活研究

第一號第一頁)

哲學的思案に慣れた人から見れば、斯かる私の議論は、餘りに平凡で實際的である事に驚かるゝであらうが、私は其處に最も大切な價值を見出して居るのである。だから出發點に於て全然相反した方向に向つて居る。著者御自身でも「兩者(著者と私)其主張の本質を異にして居るものゝ様に見えて居る」と書いて居られるから、著者の文化生活と私の文化生活とが同一視さるゝを避くる爲めに新文化主義と區別されると同じ様に、私も著者の新文化主義と私の文化生活が混同されるのを甚だ迷惑に感ずるのである。故に御互に論難し合ふて同志打を演ずるの愚をなさず、兩者異つた方面から努力して、兩者共通の最終の理想に到達すればよいのであると思ふのであるが、私に對する批評が再度も公表された以上は、止むを得ず私も禮を守つて御答へしなければならぬ破目に立ち至つたのである事を悲しむ。

七

私が「文化運動の一般的目的は國民の精神的物質的目的を増進する事であるが、其根本義として考へなければならぬ事は、國民即ち民衆を中心としたる社會全體の幸福増進と云ふ事である。」と云ふのは誤つて居ると著者が非難されて居る。其理由としては「此處に「幸福」と云ふ言葉は倫理學上でも屢々問題になつて來た様に頗る曖昧な言葉である。併し私は是と快樂とは何の相異もないものと解釋して居る。蓋し「幸福」と云ふ場合に夫れに本質的に考へられて來るものは「快樂」の外にはないからである」(文化主義原論一一頁)と云つて居られるが、私は贅意を表する事は出來ない。敢て用語に就いて議論するのではないが、著者が快樂と云はるゝのは私は逸樂プレジューラであると思ふ。逸樂は奢侈と同性質のもので幸福を破るものである。

然るに私が快樂と云ふのは英語のコンホートで決して悪い性質のものではなく、此慾望を満足させると直接又は間接に生産的エネルギーを大にするものである。私共の文化生活と云ふものは實に此の快樂的慾望を全ふする事によつて、能率生活の

標準を保つ事が出來ると云ふところに重きを置くのである。けれ共若し此慾望が奢侈に流れた場合即ち逸樂に耽る様になつた時は文化生活は破れざるを得ない。私は本著第一章に於て「呪ふべき二つの生活」と題して所謂安價生活と奢侈生活を否定したのであるから、今是れを繰り返す必要はない。

従つて私の文化生活を貴族的、ブルジョア的、享樂的であるとの非難は全然當を得て居ない。却つて一部論者は世界的に觀察を下して、私の文化生活の標準は歐米先進國の貧乏生活の夫れであると嘲笑する者さへある。然るに夫れを貴族的生活であると考へる人達の實生活が如何に幼稚であるかを想像して益々文化生活運動の必要を認めざるを得ない。

筑紫の女王と迄美まれた伊藤樺子は結婚の當夜から泣き始めて十ヶ年人知らぬ涙の人であつたと云ふ事である。夫れに反して襤褸の衣を纏ふて俄に苦みながらも感謝の生活を送つて居る幸福な貧民が澤山にある。幸福は富者の専有物ではない、富

と幸福又は逸樂とは同一物ではない。併し現代の如き經濟的壓迫の強い時には、矢張衣食足つて禮節を知るのであるから、單に必然的^{ネセシテ}欲望や、身分的^{ダイセンシイ}欲望のみでなく、快樂的^{コソフオイト}欲望を満足せしめる事によつて人の生活能力を最高度に迄發揚させたいものである。故に新時代では快樂^{コソフオイト}は幸福の一要件と認めざるを得ない。著者の考へらるゝ様に快樂を許して居る文化生活には何も餘剩^{ヨリ}ある可き筈でない。勿論原始生活の如き單に動物的存在をして居るものに比すると或る種の餘裕はあるが、其餘裕は一層有益である生活力を發揮する爲に用ひらる可きものであるから現代生活には必要條件である。要するに文化生活の目的は儘に幸福増進にあるが、其幸福は享樂でもなければ逸樂でもない、もつと奥深い有益なものである。而して其幸福が一層進化するると天福とか感謝(プレセッドネス)に變ずるのであるが夫れは今日の經濟論の範圍を脱するから今は論じない。

八

次に今日我國民の大多數は貧乏であるから、私の文化生活論は彼等には何の必要もないとの事である。曰く、「博士(森本)は既に國民の收入少きが爲めに國民の九割以上は文化生活が出来なくなつて居ると云ふのに、今更何の必要あつて「生活を學術的に研究する事や」其の「教育の普及を計る事」が必要なのであるか、其の様な「文化生活」研究をなす必要のある者は、國民の中の高々一割未満の貴族階級、ブルジョア階級だけではないか、又其の様な教育を普及して見た處で、裏長屋に住んで居る勞働者のおかみさんや小作人の臺所やが何の影響を蒙るであらうか(二一八頁)と、一應尤もの様に聞えないでもないが、私をして云はしむれば、だから大いに學術的に研究したり、教育の普及を計つたり、文化生活運動を盛んにしたりする必要があらうと云ふのである。

若し反對に國民の大部分が、既に文化生活を送つて居るのであるならば、此の種の運動は必要を認めない。併し自分の専門として居る學問に關する社會問題の中で

現代に生れた國民でありながら其大部分が未だ文明人らしい生活を營んで居ないと云ふ事が重大なる問題であると認めるから此の運動に従事するのである。若し夫れ個人的には動機の改造をなし、能率を高め、社會的には分配の公正を實現し、國家的には法律制度を改善し得るならば民衆が文化生活を送り得るだけに生活の資料が豊かになる事を信じて疑はない。現在の事實は國民の一割未満に關する事であるから放任す可しとの議論であるならば著者自身も雜誌「文化」の發行なんか中止さる可きであると思ふ、如何となれば失禮ながら氏の論著の如く普通の民衆には難解で、獨斷的の記事の多い様な感じのする哲學論を充分に解して、以て新文化の建設に役立ち得る讀者は、恐らくは一萬を越えないであらう。即ち現在家族總數の約九百分の一に過ぎないのである。併しそんな愚かな事はある可きものでない。若し著者の主張が正當であり又有益であるならば、必ず一萬が二萬に二萬が三萬に、文化主義が普及されるのであると信ずる、而して私はかくあらん事を切望する者である。

九

文化生活の特徴は、確に能率の高い事であらねばならぬ。従つて文化生活を送らんとする者は、必ず能率の高い生活を送る可く努力を吝んではならぬ。現在の大問題なる労働問題に於ても、労働者が自己の生活の向上と、社會的地位を高くする事が目的であるならば、彼等が分配の公正其他種々の大問題に關する社會運動をなすと同時に、先づ個人的には自分の能率増進に努力して、現代人として必要なる資格を具ふる事が肝要である。故に著者が引用されて居る通り私は次の如く書いたのである。「眞に今日能率問題ほど、重要で又勢力の大なるものは少いのであるから、労働問題の目標を定むるに當り、先づ労働能率を増進する事を研究の主體となす可きである、」と何も異論のある可き筈のない事を書いたのであつたが、夫れに對して著者は「博士(森本)に従ふならば労働問題の目標は單に労働能率を増進する事である。賃金問題も労働時間問題もすべて能率問題に歸着すると書いて居られる」(二)

八頁)併し夫れは大なる誤解である。著者は私が「先づ」と云ふて居るのに對して、勝手に「單に」と云ひ替へて論ぜられたのである。

猶私が勞働の能率を増進するには、勞働の遊戯化の必要を説き、勞働の目的を出來るだけ大にして、目的を行爲の内に入る、事によつて遊戯化し得るから、精神修養や勞働の神聖を勞働者が自覺する事は必要であると論ずると、著者は夫れに對して私の説によると勞働能率を増大して、個人及社會の富力を大にする爲めに、必要な一手段として精神修養や道德宗教が必要であり、文化生活の最終の目的は能率増進であつて精神修養等は其手段に過ぎないと私が云つて居ると非難される。併し夫れは私の部分的の目的を捉へて總體的の目的と獨斷される爲めに起る結果である。若し私をかくも委しく論評するだけの親切があるならば、私の論著を今少し廣く且つ深く讀んで貰ひたいのであつた。然らば却つて其反對の方面に、私の弱點を見出さるゝ事と思ふ。

私が物的文化生活を論ずる時に、勞働の目標を能率増進に置く事は何も不思議な事ではないが、勿論夫れは個人として物的生活を論ずる場合に限つて居る。廣義の文化生活になると、其目標となり又理想となるものは、そんなに唯物的のものではなく、私の考では文化生活の理想は一種の宗教的性質を帯びて居るとまで思つて居る。唯其最後の目標に到達し理想を實現するのは、相當の順序をとらねばならぬ。私共の思想には、第一第二と、種々のものがあり、目標に於ても同様である。文化運動に従事するものは正當なる作戰計畫を立てて、經濟的主義により活動を旺にす可きではあるまいか。

十

夫れで私共は眞の文化生活に、民衆を活かしむる爲には種々の方面から、教育もし宣傳もしなければならぬ。而して私が今迄の論著で發表したものは眞の文化生活論の序文に過ぎない。決して私の論じて居る事ばかりで充分だとは思はない。若し

今日の様に未だ進歩して居ない經濟學のみで文化生活を教へるならば、不具の人を作るのみである。私の關係して居る文化生活研究會で有島、吉野兩氏を顧問とし全部二十五名の學者及び専門家に、協力を頼んで居る事實を見ても、私が經濟方面だけの文化生活論では不充分であると認めて居る証據であらう。

文化生活は進歩した現代に活きた人間となるに必要な生活の状態であるから、それに要する知識は可なり廣いものである事は上述の通りであるが。私の説くのは主として消費經濟學の立場から論究せんとして苦心して居る事は前述の通りである。しかも其經濟思想に於てさへ甚だ多岐に分れて居つて、夫れを今日全部發表する事は必要もなければ又不可能の事である。例へば最終の理想論に關する思想の如きは今少し時世が進んで、時代後れの法律制度が改善されざる限り發表し能はざるものであり、或種のもものは、大學講義室限り論ず可きものであり、或種のもものは更に精細なる研究を遂げなければ發表す可からざるものである。而して今日社會全體を對

手にして文化生活を高唱するに當り、確信を以て發表し得るものは、現在の環境に於て個人的には能率増進論の如きが第一に位するのである。社會的又には國家的に考ふるに、更らに種々の問題がある。例へば法律制度の改正、社會正義、勞働條件の改善、分配問題等の問題は、廣義の文化生活論に對し能率問題以上に必要であるから私は別に是を論究して居る次第である。併し是等の問題は個人としての立場から考へる時には、余りに効のないものである。歐米人に比べると甚だしく能率の劣つて居る我勞働者が一面、個人としては先ず勞働増進を目標として大いに努力す可く他面、精神修養を充分にし、更らに外には社會的運動を盛にして社會正義の實現の爲に全力を盡す事は自然の順序である。

十一

先達私が資本主義經濟思想の欠陥に就いて講演した時に、「今日の社會では稼ぐに追ひつく貧乏なしと云へ様な事は事實でない。稼いで富を集めるだけならば、どれ

程働いても役に立たない。資本家又は企業家となり、一種の不勞所得を得る様にならないければ、富豪にはなれるものではない。さう云ふ具合に現時の經濟制度が巧妙に出來て居るのである云々」と説いて歸宅した時に、尋常四年になる私の長男が氣持よく學校で習つた唱歌を次の様に歌つて居つた。「稼ぐに追ひ付く貧乏なくて、名物鍛冶屋は日々に繁昌、あたりに類なき仕事の譽れ、槌打つ響にまして高し」私は唯默然として夫れを聞いて、私が講演で社會的に否定せざるを得なかつた教訓と、夫れを裏切つて居る慘酷な經濟社會とを比較して深い感に打たれた。勿論私の講演した事は誤りではなく、充分學術的の証明を與ふる事が出来る。けれ共小學校の歌も眞理を語つて居る事は確かである。唯現代の社會が病氣に罹つて居つて其の眞理の働が鈍くなつて居る迄の事である。夫れで私は美しい子供心を祝福し其歌の意義を文字通り教へて下すつた、教師の努力に感謝の意を表したのである。

私共の主張する文化生活の理想は甚だ高遠なものであつて、能率論の如きは余り

に卑近な論題であらう、恰も稼ぐに追ひ付く貧乏なしと云ふ様な平凡な道德論をなすが如きものである。併し未だ社會の眞相の如何を解しない子供には、社會病理を説く前に先つ個人の人格を養ふが爲めに、當然の眞理である稼ぐに追ひ付く貧乏がないと云ふ様な事を教ふる事の必要なのは云ふまでもない事である。同様に經濟論として生活向上を論ずる時に個人としては能率を高くする事を先づ目標として努力せよと云ふのは一種の策畧でもなく、手段でもなく、當然の順序である。

先づ自ら進んで、自分自身に與へられた境遇で、能率の高い幸福な生活を營んでこそ、眞に文化生活の意義を解し得らるのである。要するに、私が能率増進を文化運動目標の一つとして居る事は事實であるが、私が「夫れ以上何等の道義的要素もない」と云はれて居るのは著者自身の獨斷的附言であつて、私は何處にもそんな事を書いた覺はない。蓋し繰返し述べた様に、部分的思想の斷片を捉へて、夫れから特殊の思想を推測し、獨斷的に夫れを批評するが如きは余りに無法な行爲である

から、苟も熱心に新文化主義を主張して居られる土田氏の如きが、まさか故意にかなされたのではなくして、多分私の文筆の拙いが爲にかゝる誤解を招くに至らしめたと自らを戒めることにする。

十二

猶著者は私が「人の世になる迄」の論文で生活進化の原理を現代及未來の生活に應用せんとして居るのは危険であると非難して居らるゝ事に就いて一言しなければならぬ。「生活進化の原理を知り是を現代に應用しなければならんと云ふわけで、人類が他動物の上に立つて、絶對的支配權を專有する様になつた時代から原始時代の野蠻時代を經由し現代の文化生活の生れる迄の歴史を聞かされて居る。即ち生活問題解決の爲に、適者生存の原理を知つて、是を現代に應用せよと云ふわけである。聯合國に勝つ爲には事の正邪は兎に角として、毒瓦斯、飛行器、潜行艇に就ての熱心なる學術的研究を要すとなした獨逸のやり方に甚だ似て居ると思ふ」(文化第二卷第六號五三頁)

適者生存の原理を知つて、是を現代に應用する事は何故に悪いのであらうか。事の正邪を問はないならば、夫れは御尤もであらうが、進化の原理を知つて生活向上に資せんとするのに、何も正邪を論ぜずとの意を含んでは居ない。例へば道具の利用によつて、人の生活は著しく進化した。勿論産業革命後機械全盛時代には、人が機械に使用されて多くの弊害が伴ふて居つた。けれ共一層文化の開発に伴ふて人が機械を使用する様になつて生活は夫れが爲に大いに向上した、其處には進化の原理が働いて居る。其原理を人類の生活に合理的に應用する事によりて民衆生活は次第に上へ上へと進んで、時代の進歩に伴ふ文化生活が實現され、終には夫れが平和生活、幸福生活に同化するに至ると信ず。然るに進化の行程を悉く悪性のもものと斷定して、毒瓦斯の使用と同一視するが如きは無益な悲觀說である、飛行機や潜行艇の研究が一層進歩したとて必ずしも悪い事ばかりをするものとは限らない。生活進化の原理を理解し夫れを善用してこそ始めて生活は美化し又向上し得ると信ずるから私

は飽まで文化生活を送る人は、かゝる原理を會得して夫れを生活に應用する事を努めなければならぬと信ずる。

十三

文化生活に於て質が大切である事は當然の事である。けれ共夫れと同時に量的觀念も亦必要である事を私は繰返し主張した。而して質的論に入る前に量的論をなさねばならぬと思ふて主として物的文化生活を研究して居るのは、經濟學徒として當然の事である。然るに著者は「森本博士は殆ど總ての問題の解決に此の量的觀をとなつて居られる」(五十一頁)と非難を繰返されて居る。處で私の考へでは質と量とは極く密接な關係を有して居るもので量的觀の乏しい質的觀は屢々正鵠を失するものである。例へば小學校教員の如き、其質に於ては國民教育の重任を脊負つて随分烈しい心身の勞務に従事する頗る貴重なものであるが其量に於ては、薄給を以て遇せられ、更に教育費節減問題の如きを以て苦められて居る。先づ彼等を量的に、生活權

の自由行使をなさしむる事なくして、高尚な質的理想論を盛にしたとて、實際には何等効のないものであると思ふ。故に私の文化生活運動は富の分配問題にも重きを置いて居る。私は此の問題に關する考を一層明かにせんが爲めに嘗て次の如く論じた事がある。「唯當面の問題として私共が現代社會の真相を研究するとすればする程個人及社會生活を新時代に適應する様に改造して、正義と人道との上に新文化を建設し以て「最大多數者の最大幸福」を精神的及物質的に實現する事が實に國家の急務である」と心から感せずしては居られない。是れに對しても私が「最大多數」「最大」と云ふが如き量的の言葉を使用するのが誤りであると、無意味で不自然な例を擧げて非難されて居るが私は夫れが爲に却つて著者の精神に疑義を有するのである。

若し著者が主張される様に、文化生活を量的に取扱ふのは誤りであると云ふのならば、生活は經濟的に研究す可からざるものとなる。然るに生活は生活資料を絶對に必要とする。而して其重なる資料は經濟物であるから其處に價值問題が發生する。

價值が効用と異つて居る重なる點は價值には稀少性と云ふ量的觀があるからである。鐵よりも有用でないダイヤモンドの方が鐵よりも價值大であると人が認識して居る間は經濟學は主として量の學問である。従つて凡ての經濟思想は量的觀が必ず其の背後となつて居る筈のものである。要するに文化生活の量的觀は勿論凡てではないが、經濟的立場から考へると甚だ重要なものであるから、物的文化生活觀は價値の大なるものである。

十四

議論の性質は少しく異つて居るが、福田徳三博士は、私が中流階級研究を所得の大小によつて論究したのは不當である。階級の分立は質の問題で量の問題ではないから、階級別は所得の種類によつてなす可きものであると主張されて居る。即ち「所得の種類を異にするとは質の問題であつて量の問題でない、階級の分立は質の問題であつて量の問題でない、従つて森本博士説の如く單に所得の大小を異にする事が

階級分立の基調ではないのである」(改造第七月號)

私は福田博士説を一個の説として敬意を表するが、中流階級の研究を所得の大小の方面から殊更に研究を行ふたのが、最初からの私の目的であつたので、必ずしも不當の方法ではないと信ずる。殊に其方面から研究をするのは決して私が創造したのではなくして、先輩學者が既に認めて居る。中流階級の質的研究も勿論重要であるが、私は唯其方面の研究を他人に譲つた迄の事である。猶此問題に關しては昨年未東京商科大学で開かれた社會政策學會大會で相當に同博士と論議を交へた事であり、且又拙著「生存より生活へ」の第一章に於ても此の問題に關して論じて置いたから此處に是を省く。

以上論述した事の歸着する要點は何であるかと云へば、私の文化生活觀は主として經濟的立場から物的文化生活論をなし居るのであり、心的文化生活論の論究は暫らく之を他の研究者に譲るのである。而して私が其の物的文化生活論に於て今日

まで論述したものに於ては今尙何等の大なる誤謬を認めないのみならず、此の方面の研究が益々重要になつたと信ずるが故に事情の許す限り、此の文化生活運動を繼續し、次第に都會生活から農村生活の方面にも普及す可く、又必要に應じては更に新たなる手段をも講じ同志協力して民衆をして悉く文化生活を樂ましめ得るまでは努力を吝まないのである。(三月二十六日)

六 自由の生活

“There are dangers, but they will all vanish if the importance of liberty is adequately acknowledged.....”

In this as in nearly everything else, the road to all that is best is the road to freedom.”— B. Russell.

『危険もあらうが、自由の威嚴がよく認識される時、それらの危険はすべて消へ失せるであらう。……』

如何なるものでも、最善への道は自由への道である。』

各種の生活において、民衆が各自人格の自由を尊重し、壓迫のない自由の生活を樂しみ得た時に、始めて私どもの高唱する文化生活の完成を期することが出来る。

日進月歩の學理を應用して生活を合理化したり、因襲の囚はれから生活を解放したりして能率や幸福の増進をはかるのも、つまり私共の憬がれて居る自由の生活に乏らんがためである。自由のない處には創造がない。創造力の欠けた生活は退化の生活で、私共は極力これを排斥する。

元來文明人の社會生活には必ず、慾望の満足、權利の行使、義務の實行の三ツが全うされなければならぬ。慾望の満足によつて生活が營まれ、生活するものには必ず生活權の行使と、それに附帶する義務の實行が伴ひ、以て初めて自由の生活を送ることが出来る。

然るに、近來盛に覺醒し始めた民衆の慾望を充分に満足させるには、我日本の國土は餘りに小さく、無能率な人口が餘りに多い。生産業は餘りに振はず、進取の精

神はあまりに薄弱である、搗て加へて法律制度があまりに古い。かうした結果彼等は生活必要に對する慾望でさへ充分に満たし得ない、即ち今日の國家は國民に生命の安全さへ保障し得て居ないのである。

だから、少數の特權階級者を除いた社會の大多數者は、身を粉にして働いても、到底經濟壓迫から脱出する事が出来ない。さりとて若し甘んじて苦役に従事しないならば、たゞ死滅を待つのみである。かくも現代の經濟生活は殘酷であり又不公平なものであるが、資本主義の存續する間はそれが已むを得ないプロレタリアの運命であらう。

けれども、人として持つて生れた理性の必然性は、個性の發揮によつて、精神的には何の束縛をも受ける必要はない。不幸にして今日民衆は、經濟生活において、

はげしい壓迫に虐げられてゐるのであるから、せめては精神生活において、自由の生活を全うすべきである。

如何なる人でも、自然の崇高、情緒の善美、正義の嚴肅、人道の清淨を、凡べてにまさつて愛慕するものは、次第に眞理に親しむやうになる。そして眞理が惜みなく私どもに與ふるものは、あらゆる拘束から人類を解放する自由の精神である。

自由を意識する私の個性と、その自由を與ふる眞理の實在との間に生ずる秘密の關係が私の宗教生活である。このがくれたものが全生活の力となつて絶對無限の自由生活を營ましめ、何ものの強制をも受けずに弱き乍らも、希望と、感激と、勇氣を與へる。巨萬の富も、無上の名譽も、所謂思想征伐法の如き野蠻法律も、この生活に對しては全然無能力である。

最大多數者が自由の精神生活に生くる時、始めて生活の動機が改造される。そして、その新動機の上に新らしい經濟生活が建設されるであらう。その時こそ自由を壓迫するすべての主義は無力になり、時代おくれの諸制度法律は自發的に改廢されて、遂には經濟生活においても自由の生活がおくられるやうになるのである。

憎むべき虚偽の生活、嫌ふべき壓迫の生活、憐れむべき不合理の生活が、かげをひそめて美はしい自由の精神的及物質的生活を楽しみ得る眞の文化生活が民衆によつて營まるゝまで、私どもは休みなくよき戦を戦はねばならぬ。

七 「生」と「死」の經濟

一 刻下の經濟問題

經濟界は革新されなければならぬ。而して其前提として、今日看過されて居る、「生命の經濟」に世人の注意を喚起する必要を認めるのである。不景氣を挽回して經濟界の革新を圖るには、先づ生産費を低減する事が必要で、其第一手段として、勞働賃銀の低廉を主張する論者が甚だ多い。中外商業新報で實業界諸名士の生産費低減問題に關する意見を求めたものを見るに、殆ど異口同音に勞働賃銀の低廉を以て生産費低減問題の根本條件として算へて居るようである。けれども私は其れに讚意を表することが出来ない。勿論生産費の低減と云ふとは、産業發達、殊に外國貿易の發達を計るために必要であり、又賃銀の低廉が直接生産費に影響を有するのは當然

のことであるが、若し其の程度の宜しきを得ない時は勞働者は生活費に不足を生じ、仕事に熟練を積むの餘地少く、家族共稼ぎの必要を生じたり、病氣に罹り易くなつたり元氣が衰へたり、一般に精神的にも肉體的にも健康を保持することが出来なくなる。その結果として低廉な賃銀は、勞働能率の低下を意味して、却て、産業界の不振を起すに至るものである。

我國の勞働賃銀は、從來無法に廉價であつた。漸く歐洲戰爭の頃から其率をあげ戦前に比して二倍乃至三倍となり、勞働者も稍々人間らしい生活を送り、次第に能率を高くし得る資格を具へるやうになつた。それでも今日米國では、普通の勞働者でさへ一日拾圓内外の賃銀を得て居るのに我國の賃銀は、僅に二圓内外に過ぎないのであるから、何も賃銀が高いと云つて騒ぎ立する必要はないのである。只、以前が餘りに安過ぎた爲に賃銀低落問題が因襲的に惹き起されたるに過ぎない。今日は從來のように安い勞働を特色として世界競争場裏に立つ事は不可能になつ

た。再び賃銀を以前のように引き下げ、それだけ生産費を低下せしめんと企つる事が、一見資本家にとつて、甚だ有利なるように見ゆるであらうが、實は、夫れは其反對の結果を生ずるのである。適度に高い賃銀は労働能力の大を意味し、引いて經濟界の振興となり、資本家もそれによつて利益を享くるようになるのである。蓋し時勢は著しく進歩して、今日では労働は商品と同一視すべきものでないと、資本家も労働者も、歐米の労働者も日本の労働者も凡て同等の生活權を有する同じ人間であることが世界的に認められて居るのである。云ふまでもなく、今日我労働者の能率は彼の労働者に比して、劣つて居るけれども、現在我國に於けるが如き労働條件の下で、労働者に餘り多くを望むのは無理な注文である。眞に能率の比較を正確に行はんとするならば、彼我労働者を一定期間同一條件で働かした後にすべきである。故に刻下の問題は出来る限り高き賃銀を惜氣なく拂つて、労働能率を高め得る素養を作り、實際經濟活動を盛にして以て經濟界を根底から革新することである。今日此の

不景氣に處じたのを好機會として、我國民は根本的に產業界の振興を計るべく、經濟界の革新を促すことが最も大切なことである。

二 現代労働者の運命

資本主義の盛な今日の經濟界では、労働者と貧乏人とは殆んど同意味であつて、無産階級者なる多數の労働者は先天的に貧乏に生れて貧乏に死する不幸な運命を有して居る。昔から云つて居るやうに、貧乏を生むものは貧乏であつて、貧乏は常に循環的に起るものである。ハリー博士の名著「貧乏とその悪性なる循環」(T. B. Hurry: Poverty and its Vicious Circles)に於て、今日の社會を自然の儘に放任して置くならば、貧乏は絶えず次の如き循環によりて同じ運命を繰り返すものであると云ふ事を頗る興味深く論じ居る。

- 一、貧乏↓不完全なる住居↓不健康↓失職↓貧乏↓不完全なる住居↓……
- 二、貧乏↓不完全な食養↓營養不良↓賃銀低下↓貧乏↓不完全な食養↓……

- 一、貧乏↓不完全な教育↓無能↓貧乏↓不完全な教育↓……
- 一、貧乏↓飲酒↓能率減少↓位置を失ふこと↓貧乏↓飲酒↓……
- 一、貧乏↓信用の低減↓借金↓高き利子↓貧乏↓信用低減↓……
- 一、貧乏↓無思慮↓大家族↓貧乏↓無思慮↓……
- 一、貧乏↓少量購買↓貧乏……

ロントリーは更に違つた方面から労働者は一生に於て、最も大切な時期に三度貧乏線以下に降る運命を、先天的に有してゐることを説いて居る。即ち、其の第一期は生長に最も大切な幼年時代で、自分が十歳前後になつた頃には、續々と出産があつて大家族となり、一家は貧困に苦む。第二期は最も盛に活動すべき壯年時代で、三十五前後になると今度は自分の子供が澤山に生れて、自分等の經濟力が阻害されて収入が不充分になる。第三期は平安な晩年を樂しむべき老年時代で、子供等は成人し結婚して家を去り、自分は高齢の爲に健康が衰へ、失職して収入を失ひ、

終に貧乏の内に苦みつゝ此の世を去らねばならぬのである。

かくの如き循環や、囚はれた運命を破つて新しい合理的運命を開拓し、彼等の經濟的地位を向上し得る條件は多々あるが、其の内最も重要なものゝ一つとして考ふ可きは、賃銀の高が少くとも、「生活賃銀」^{リビングウエア}でなければならぬと云ふことである。然るに戦時好景氣の時に漸く賃銀が高くなつて「生活賃銀」と認むべきものに近付いたものを再び人爲的に、引き下げを行はんとするが如きは、經濟の根本を誤るもので、折角經濟界革新の時機が到來したにもかゝらず、其の機をとらへずして更に不能率の舊時代に後戻りせんとすると同様である。現代資本主義が如何に勢力を逞しくしつゝあるとは云へ、第三者の立場から公平に考へる時に、資本家の報酬は不當に高くして労働者の賃銀は不當に低いと云はねばならぬ。生産費の低減に必要な事は決して賃銀低廉のみを算ふべきでなく、それ以上に生産能率を大にすると、或は不當なる資本家の報酬を減少すること等に依て其の目的を達する事を充分に研究し

なければならぬ。

三 經濟界革新の根本的條件

賃銀の低廉とか、利子の低廉とか云ふものを、經濟發達の根本條件として數へるのは決して當を得たものではない。然して景氣の恢復或は經濟發達、曳いて經濟界革新の根本的條件として注意すべき三事項を此處に擧げることが出来る。

第一は自然的條件である、即ち自然の地勢、地質、地形、氣候等の關係によつて根本的に經濟發達に影響を有する。

第二は個人的條件である。即ち人類各自の知識、性質、健康、才能等の如何によつて經濟界に及ぼす根本的影響である。

第三は社會的條件である。即ち個人の組織して居る一定の社會組織の如何が經濟發達に基本的に影響を有するのである。

第一の自然的條件は勿論偉大なる勢力を有して居るものであるが、之とても人智の開發によつて或程度までは人が自由に利用し得るものである。けれども一定の度を越えたと到底其の時代の人力の及ばないものであるから、今此處に問題とするのを避ける。それで今經濟發達の根本條件として、特に注意を喚起せむとするのは、個人及び社會的條件である。而して此兩者の基本論としては、人そのものの數量及び素質如何に就いて考へなければならぬ。即ち人口の質と量との問題が經濟發達の基本條件であつて、其の宜しきを得たる時に經濟界の革新を來し得るのである。若し此の問題を適當に解決するのでなかつたならば、其の他の枝葉問題に何程努力しても効果を収めることが出来ない。幸に今日、社會は進歩して此の基本論に研究を進める必要を一般に認るようになった。故に此處に從來等閑に附せられて居る、生と死の經濟に關する主なる事項を論述するであらう。

四 生の經濟

人口に關する經濟問題の中で、頗る重要なものでありながら、案外、社會の注意

を引いて居ないものが二つある。一は生の經濟で、二は死の經濟である。生の經濟と云ふのは、出産の目的を達するために最少の勞力で最大の効果を収めるとである。換言すれば、生れたものは皆其の壽命と力量を最高限度に發揮して、人生の浪費を最少限度に減少することである。然るに、之を事實に就いて見るに生の空費が實に多いことに、驚かざるを得ない。今少しく統計に表はれたる事實の一例を擧げん。

我國の出産率の多いことは周知の事實である。戦前に於て、例へば一九一一年我
出産率(死産を除く)は人口千に就き三四・一であつたのに、西洋諸強國では皆甚だ少
く英は二四・佛は二一・獨は二九・伊は三二・一であつた。而も我國の出産率は年々増加
して居る、即ち明治七年から十六年頃は人口千に就き二五であつたのが次第に増加
して二十七年から卅一年になると三〇になり、卅二年から四拾一年頃は三二・四拾
二年から四拾四年には三四と云ふ具合に殆ど規則正しく出産率は増加して來たので
ある。加之、其當時歐洲諸強國では、我國の正反對で年々出産率は減少して、いづ

れも佛國が率先して示した事實を繰り返し始めたのである。斯の如き事實のみを基
礎として考へ、軍國主義者は極端に其の野心を煽らせたのも無理ない次第である。
曰く大和民族の人口膨脹力は世界無比であるから將來益々戰鬥力も大になり、覇を
世界に稱ふることも決して不可能ではないと。

然し、私共は其の當時からかゝる議論に反對して居つた。加何となれば、生産率
の大であると云ふ事實だけでは、人口の真相を判斷すべきものでないのみならず、
我國では民衆の精神状態が進歩すると生産率も自然に減ずるであらうと信じたから
である。果せるかな明治四拾四年の生産率三四・一は最高限度であつて、其の後次
第に少しづつ減少して、其の翌年から大正四年までは三三・一になり、大正五年は三
二・九、六年は三二・七、七年は三二・二になつた。かくして我國も漸く他の文明國と
同一の經路を辿るようになったのである。かかる出産率減少の事實だけならば一部
論者のように、我國の將來を悲觀する必要はないのみならず、却て慶賀すべき事であ

る。今日の如く物資の缺乏を來してゐる時に、我國民を改造して、眞に實力に生きるものとするには、生産率減少は先づ人口の良質のものを多く得んが爲に必要なる當然の結果である。

何れの國でも、文化の進むに従つて生の經濟に注意するようになるから、現代の經濟組織が根本的に改造されざる限りは、自然に出産減少の現象を起すに至るものである。如何となれば文明の進むに従つて、精神病者や花柳病者が多くなること、或は晩婚者が多くなること、或は飲酒が盛んになる等の理由により、生理的に出産を減ずるのであると主張する論者もあるが、其れ以上に有力な原因と考ふるのは、文化の進むに従つて、個人の繁殖意志が減少することである。元來繁殖と云ふことは、性慾と子供を愛する念慮が主に働いて起る結果であるが、今日の如く、經濟上の壓迫が強くなると到底多數の子女を充分に養育し行くことが出来なくなり、子供の粗製濫造は親の爲にも、又子の爲にも多くの不幸を生ぜしむるに至ることを、個人が

自覺するようになる。其の結果、性慾を制し、早婚を慎み、自發的に産兒に制限を行ふものが多くなり、引いて一般の出産率が減少するのである。更にブレンタノ教授の説によると、文明が進むと、性慾 (Geschlechtstrieb) 及び子供を愛する念 (Kind-*erliebe*) 以上に高等なる他の慾望を満足させる設備が出来て、繁殖意志は減少するものであると論じてゐる。また女子自身及び家人が、妊娠、出産、保育等の苦痛を嫌ふ念が強くなり、又生殖慾を抑制したり或は避妊を行ふようになるのであるが、之等の事實は現在の經濟事情を根底より改造しない内は止むを得ないことで、寧ろ、思慮深き人が當然行ふべきことと認めねばならぬ。

五 不經濟なる人口増加

經濟上の見地から考へるに、産兒が悉く立派に成人して、自己の能力を充分に發揮し得るならば、多産は喜ぶべき現象であるが、其れは現在では不可能であることは既に述べた通りである。現在の經濟界では出産率が高くして過度に増加し行く人

口を満足に支へ行くことは出来ないことになつて居る。自然と人口との調和は既に破られて居る今日の事であるから、出産率が不當に多い時には、種々の理由で死亡率も亦多くなると云ふ事實が明に統計に示されて居る、即ち澤山に生れるが澤山に死ぬのであるから、結局骨折り損の草臥儲けに終るのである。此處に人生の浪費として、不經濟極まる人口増加が起るのである。

元來、生理的原則として、生物の神経組織の複雑になる程度と繁殖能力との間には一定の關係を有してゐるのである。神経系が発達して、生物が高等になればなる程子孫の繁殖力は弱くなる。例へば、魚類の出産数は一ヶ年約六十萬であるが、兩棲類に進むと、四百に減じ、更に爬虫類は十七、鳥類は五、哺乳動物は三になり、哺乳動物中でも高等なる猿類になると一以下に減るのである。如斯現象の起る原因は主として、親の保護の有無如何によつて起るのである。即ち親の知識が発達しない爲に到底充分に子供を保護し得ないものは、多數に出産して、其の内の一小部分

だけを生き残らしめるのである。しかし、知識が発達すると親の子に對する保護が充分に行き渡るから、産んだものは、其の大部分は成長せしめ得るが故に、出産の数は少くとも差支はないのである。如斯にして、出産の少い事は、動物の高等なることを意味するのであるから、同じ論法で、人類も知識が増進すれば、出産の数を少くしても、生殖の目的を達せられるから多産の必要はなくなるのである。

出産の大なるは、人口の大を意味する場合に於ては喜ぶべきものであるが單に出産数の大小は、人口の自然的増減に關する原因の一半に過ぎないことを記憶せねばならぬ。何程出産が數多くとも、死亡も之に伴ふて大であつたならば、何の効も無い之に反し出産は比較的小であつても、死亡も同様小であるならば、人口は健全に増加するものである。此處に於て死の現象を出来るだけ、經濟的に行ふ必要があるのである。

六 死の經濟

死の經濟は、自然の死を最大にして、天死や其の他不自然の死を最小にすることである。さて我國の事實を見るに出産が多いと同じように死亡率も甚だ高く、殊に乳兒及び五才未滿の死亡率が頗る高いのである。故に折角苦しんでやつと、生れた子供も壽命を全うし得ないで、其の大多數は一年未滿即ちまだ人間味の愛らしさが充分に發現されない内に死んで終ふ。然らざれば五才未滿の可愛らしい盛りの方に此の世から奪ひ去られるのである。かゝる事實は單に入口の減少を惹起するのみならず、父母其の他のものが、それによつて受くる、精神的及物質的打撃は實に莫大なものであるから、之程不經濟な浪費はないのである。今進んで統計に現はれた事實を尋ねよう。

我人口千に對する死亡は、明治七年乃至十六年頃は、約十八であつたが、其の後の十ヶ年には、約二十一に増加し、次の十ヶ年には二〇・五に減じ、次の十ヶ年に更に増加し二一となり、次の大正三年乃至七年には二一・七に増加して居る。若し其れ

大正七年だけの事實を採るならば二六・七の驚くべき高率を示して居るが、之は流行性感冒の流行したのが一原因であらう。之を要するに我國の死亡率は大體に於て年々増加する悲しむべき傾向を有して居るのである。

次に年齢別に就いて考ふるに、五歳未滿のものは死亡總數の三割六分の大多數を占め、五乃至十歳は約四分、十乃至十五歳は人生中最も死亡の少い時で僅に二分であるが、それから更に増加して、四分以上に進み行くのである。如斯く、死亡の大部分は五歳未滿に起るのであるが、殊に近年憂ふべき事實は乳兒（一歳未滿）の死亡率は年々増加する傾向を有し、大正七年には非常に多くなり、出産百に付一八・九の高率である。即ち生れた赤子の約二割のものは一歳未滿で死んで仕舞ふのであることを思へば、此處に人生の悲しむべき浪費があることに顧慮するであらう。かかる事實を目前に有して居るが故に、寧ろ始めから出産を制限する方が利益であるは云ふまでもない事である。

大正七年に我國の死亡數は、人口一萬に付き、二百六十八であるが、其の死亡原因の最多數を占めて居るのは、肺炎及び氣管支肺炎の三六・九で、それに肺結核の一七・八、と氣管支炎の一・七、その他呼吸器病に屬する流行性感胃一二・五、實布珪利亞及格魯布〇・七、百日咳一・〇、その他六・〇を合算すると八六・六の多きに達して居る。此の割合は死亡者百人の内で三二人が呼吸器病で死ぬ事になる。故に人の壽命を全うせしめないで、殘酷に人口淘汰を行ふものは、病魔殊に肺病である。若し之を豫防して、人類の病死を或る程度まで防ぐことが出来たならば、社會の生産能力は増加し、幸福の増進は大になるであらう。しかも、之等の事は決して不可能のことではないから將來死の經濟が一層社會の注意を引くようになった場合は人生を一層經濟的に營んで經濟發達の原動力を盛にして經濟界の革新を起すことが出来るのである。故に私は死の經濟とその基となつて居る、生の經濟と云ふ問題が今後充分に研究されむことを識者に訴へざるを得ないのである。

七 平和の殺人

何と云つても大切なものは人の生命である。生命の經濟程大切なものがないのに、之に不注意であるが爲に病氣以外にも莫大なる生命の浪費が行はれることは實に驚くべきである。經濟の本源である生命に、著しい浪費が行はれて居るのに經費節減とか生活費減少とか、勤儉、貯蓄等の如き枝葉の問題に熱中するものが、今尙少くないのは思はざるの甚だしきことである。戦争は終局を告げて、平和が恢復し、極力生産創造に努力せねばならぬ時に、今尙戦時と同様に空しく生命を奪取する、平和の殺人が行はれて居ることに大いに世人の注意を引かねばならぬ。

近着のサーヴェー誌にヘルドマンは次の様な事實を擧げて居る。「戦争の目的は、殺人及び破壊であり、平和の目的は創造及保存である。然るに、平和の職業は戦争よりも一層多くの殺人と破壊を行つて居る。米國が十九ヶ月間戦ふた間に殺された兵士は五萬百五十人であつたが、其の間に米國で平和の職業に従事して殺された人は

十二萬六千人であつた。尙同期間中に戦場で負傷した兵士は二十萬人であつたのに平和の職業に従事して負傷したものは二百萬に達して居る。

千九百十年に米國に四十萬臺の自動車があつた。千九百二十年には夫れが九百五十萬臺に増加して、人口十一人毎に一臺の割合になつて居る。而して千九百十年に自動車で殺された人の數は十萬の人口に對して二人の割であつたものが、千九百二十年には約十二人に増加して居る。ポートランド市だけで、千九百十七年に交通機關の障害が二千二百あつたのが、千九百二十年には、一萬三拾八になつて居る。然るに研究の結果によると、之等の災害の約八割は充分に豫防し得るものであることを證明して居る。即ち其の四分の一は危険なる機械に適當なる防禦設備をすることであり、その四分の三は勞働者を教育することである。而して其の教育は小學時代より適當に始めなければならぬ。」

更に異つた方面から、生命の經濟に如何に愚かな空費が行はれて居るかに就いて

前の大統領タフトを會長として居る、延命協會で發表した事實を擧ぐれば、次の如くである。「米國では毎年豫防し得る病氣の爲めに死ぬるものが約六十萬人もある。又平均毎日少くも三百萬人の病人があるが、其半數は不必要な病氣に罹つてゐる。そしてそれらの病氣や不自然な死亡の爲めに費やす一ケ年の損失高は三十億萬圓以上である。若し國民が現在知られて居る科學上の知識を、自己の生命に適用したならば、平均十五ケ年づゝ生命を延ばす事が出来る。猶戰時に行つた體格検査の結果によると、二十一才乃至三十一才のもので、軍人に不適當な體格を有するものが、三分の一以上あつた。そして其内不具者を除くと、約六割は豫防し得る原因で不健康となつて居る。」

恐るべきは人類の知識の足りないが爲めに、生産の主體である人の生命が甚だしく不經濟に使用されて、其能力が減じ、壽命を短縮して居る事である。

八 人の命數

生命の經濟の目的は、要するに一つは生命を出来る丈延長する事と、二は一生涯の生産能力を最大にする事である。然るに時は絶対的の支配權を人類に對して有して居るから、如何なる階級でも、年と共に極く公平に老いて、一步一步と死に近づいて居るのである。故に統計的に命數即ち將來生活を續け得る年數を定める事が出来る。我國に於て研究した結果によると、各年齢人口の將來生存すべき豫定年數を完全平均命數と稱し、次の如き數が示されて居る。

二十才の男は四十一年、	女は四十二年
三十才の男は三十四年、	女は三十六年
四十才の男は二十七年、	女は二十九年
五十才の男は二十年、	女は二十二年
六十才の男は十三年、	女は十五年
七十才の男は八年、	女は九年

等である。勿論特別の場合はあるが、總體的に考へると、如何なる人でも同一運命に支配されて、以上示した一定の時期が到達すれば死ななければならぬのである。然かも以上の命數は、常に生存を續け得る丈けのものであるが、若し國民の活動すべき所謂生産の年齢を、十五才乃至十六才とし、六十才を人生の限度として計算したる、有限平均命數は次の如く短かいものである。即ち男女は同年數であつて、二十歳のもものは三十三年、三十歳のもものは二十六年、四十歳のもものは十八年、五十歳のもものは九年、五十五歳のもものは五年、六十歳のもものは零年、等の餘命より持つて居ないのである。

昨年死亡した、オックスフォード大學醫科教授オスラー博士が、嘗てジョンズ、ホプキンス大學で發表した有名な研究の結果によると、人は五十歳にして幾分有用の度を減じ(Less useful)六十歳にして無用に(useless)なるとの事である。實は私自身この講演を聞いて其當時から大いに生命の經濟に就いて研究の必要を感じて居

た。其翌日の米國各地大都會の新聞電報欄に、其講演の大要が記載されたのであつたが、氣の早い米人のうちで自分がすでに無用の人たるべき年齢に達したのを悲觀して、自殺したものが數名あつたと云ふことは、一つの悲劇で今でも米人の一つ話しになつてゐる。勿論除外例は尠くないのである。殊に歐米に於ては、六十歳以上にして尙有益なる激務に従事して居る人の數多いのは周知の事實であるが、概括的に觀察を下すと、オスラー説は已むを得ない人の命數を學術的に述べて居るのである。けれどもこれは現在の事實から推算したもので、固定した不變性のもではない。今後生命の經濟が、諸方面から充分に研究されて、國民が覺醒し、心的及物的健康を充分に改善する事が出来たならば、一方に於て命數を延長する事と、他方に於て、その生産能力を増大する事とによつて、今日の經濟界に革新を來す事が出来るに至るであらう。經濟發達に必要な問題が今日色々論ぜられてゐるが、多くは第二次的の枝葉問題であつて、第一次的の根本問題は、生命其のものゝ經濟的消費を

全うする生命經濟論でなければならぬ。

九 現代の常識二つ

以上論述した生命に關する事實を、注意して考究すると、少くも二つの事が現代の常識となつて居る筈である。

第一、産兒制限である。生命經濟論の土臺となるべきは、人口と自然の調和を計る事である。これが爲めには、自己の經濟能力と、産兒の數との間に經濟的調和を見出さねばならぬ。幸今日産兒制限論は社會の注意を促して居つて、今となつては、突飛な議論として嘲笑に附する識者は甚だ少くなつた。「生めよ殖えよ」といつて盛に人口の數の多きを理想として居たのは舊時代の人口論であつたが、今日では人口の數よりも質に重きを置く事が時代の常識となつたのである。

勿論良質の子供を生んで充分に養育する事が、保證されて居るのであるならば、大いに生むべし殖やすべしであるが、現今の經濟組織は、それを許さない。故に

個人及び社會の幸福を計り、子女の爲め、又親の爲め、福利を計らんとするものは、當然自發的に産兒制限を行ふべき義務を有して居る。而して、現在の我が經濟事情に適應する産兒の數に就いては、勿論確定する事は出來ないのであるが、嘗て獨逸で主張されて居つた三^{ドライ、キンゾー・システム}兒制がわが中流以下の家族にとつて、理想とすべきものではあるまいかと思ふ。

若しそれ國民各自が、産兒數を自己の能力に適合する程度に制限し得るまでに、向上した場合には、親の保護が子供に充分行き届く結果として、前述した乳兒死亡、死産、五歳未満者死亡、及一般死亡率に多大の影響を及し、又營養不良其他生理的に起る病氣も次第に減少して、生命の浪費が省かれるといふ事は當然の結果である。かくの如くにして始めて生命の經濟が合理的に行はれ、經濟界の革新を促がすやうになる。

第二の現代常識として考ふべきは生活の改善である。生命經濟論の根本條件たる

べき事は、從來の不合理な生活を改造して人生の能率増進を期する事である。何等科學的基礎を有せず、只習慣の惰性によつて用ゐられて居る我國獨特の食物、衣服、住宅、社交、等による生活に於ては、經濟的に生命を保全するには餘りに多くの故障があつて、到底各人天與の個性を開發し能力を發揮し得る事は出來ない。その結果は社會經濟の無能率に陥るのである。故に宜しく日進月歩の科學研究の結果を日常生活に適應して、能率的生活を物質的にも精神的にも營み得るやうにするのが、すべての經濟問題の根本義である。これ等當然の順序を経ないで、不自然な變則手段で經濟發達を望むのは無理な注文で、何時までたつても經濟界の革新を來す事は出來ない。

要するに刻下の大問題である不景氣を恢復して、經濟發達を來たすに必要な事は色々あるが、それ等の基本となるべきは、人口の大多數を占めて居る、プロレタリア階級の生産能力を大にする事である。これが爲めには先づ彼等の經濟的自由を

束縛して居る、貧乏生活から彼等を解放して、貧乏によつて起る有害なる循環系を破る事である。而して今日産兒の合理的制限と、生活の合理的改造とは少くもその有力なるものとして數ふべきである。

八 結婚の改造

一 結婚改造の必要

時代の勢力は實に偉大なものである、例を軍備縮少問題に採りて考へても、僅か一ヶ年前には、當局は勿論の事、議會でも、社會でも、皆突飛な極端論として顧みなかつた。私自身も國民教育費國庫支辨論に關聯して僅かに軍事費二割減を主張するのでさへ、随分遠慮して議論せざるを得なかつたのであつた。然るに、時代精神はワシントン會議の大勢を支配して、我國全權さへ思切つた縮少案に賛意を表されて居る、昨年の議會で、尾崎行雄氏の縮少案を、即座に否決して得意であつた議員諸君も、今日漸く彼等が時代思潮を解しなかつた不明を恥ぢて居る事と思ふ。國家萬能主義の時代から、世界平和時代に、着々と進み行く現代の活動振りを見て、心か

ら快感を覺えずには居られない、個人としても亦國家としても、時勢と共に進歩し得ないものは、現代に生存權を放棄して居るのであるから、社會進化の行程からとり残されて、衰頹するのは止むを得ない運命である。

斯く考へつゝ、我國現在の社會諸相を研究すると、時勢に逆行して居る事物が、各方面に少からず存在して居つて、世界の日本としての進歩を阻害して居る事が少くない。近來先覺者連が口を揃へて、社會改造の急務なる事を高唱したのは蓋し當然の事である。然り社會を改造し、我民衆をして新時代の精神に覺醒せしむる事ほど今日重要な事はない。然るに社會改造が叫び出されてから、既に數ヶ年を経過して、此一九二二年が生れ出でたのに、其改造成績が頗る不良であるのは何故であらう。

私は信ずる、今日社會改造の實績が、意の如く舉らない理由は、其改造論は主として、社會又は經濟制度等の、外的改造論であつて、其根本となつて居る內的改造

論即ち、動機の改造論はまだ重きをなして居ないが爲めである。

動機が改造されるならば、社會運動は秩序正しく徹底的に、行はれるであらうから、必ず家族の改造が問題になる。我が家族生活は舊い／＼時代に出來た家族制度によつて、今猶束縛されて居るのであるが故に、家族其者が社會改造の原理を裏切つて居る。従つて、社會改造は先づ、社會の單位である家族の改造から始まらねばならぬのである。而して其家族生活の出發點は、婚姻にあるのは云ふ迄もない事である。我國在來の婚姻制度や其習慣は、甚だしく非文化なものである事は、明白な事實であるが故に、是れを時代に適するものに改造する事によりて始めて健全な家族が成立し、夫等が集合して始めて理想的社會が實現されるのである。要するに、社會改造の根本義は動機の改造であつて、其の社會に顯はるゝ結果は先づ結婚改造として表はる可きものである。

二 動機の改造

動機の改造と云ふ事に關しては、私は本書第二章に於て次の様に書いたのであるが、議論の順序として今是れを繰す事を許されたい。

「見よ！見苦しい綱紀の廢頽、風紀の紊亂を。大正の聖代に百鬼續出して文化の生血を吸ふて居るではないか、國民の模範階級に起つた事だけでさへ、東京府、市の疑獄、滿鐵最高幹部の收賄、大學教授助教の卑賤な婦人關係等を筆頭に大小數へ舉げれば殆んど際限がない。

然かも政府當局は深く之を怪ます、社會も亦大喝して之を責むる勇なきは、蓋し國民の良心麻痺しし道義心の低級なるを曝露して居る爲であらう嘆かほしい事である。

心的文化生活の骨子である可き正義人道が、かくまで地におちて顧みられない現代社會であるのに、文化主義の哲理を誇學的に宣傳したり、或る實生活に於ける食、衣、住、社交等を改善した位で、文化生活を營んで居ると思ふものが少くない。勿

論これ等も必要な行程ではあるが、眞に現代文化に生くる生活はそんな淺薄なものではない。先づ根本義として、各自進んで個人生活の動機を改造する事に最善の努力を盡し、以て道德的改造の實を自ら舉げ得る様にする事が先決問題である、「人若し自己の魂を失はば全世界を得るとも何の益あらんや」である。

顧みれば我國も大戰後漸く「世界の日本」となつて、國際的舞臺に踏み出す様になつた。そして氣がついて驚いた事は、幾百年來我誇りであつた大和民族の文明も、世界文化に比較すると、幾多の缺陷が存在して居ると云ふ事實であつた、夫れがために後ればせながら、先年來各方面に改造問題が提唱されたのは眞に慶賀すべき事であつたが、物事に膩き易き我國民性の短所は又こゝに現はれ、未だ改造の實が舉つたと云ふでもないのに、早やその改造論がぼつ／＼下火にならうとして居るのを私は深く悲むのである。

かゝる時に當つて取り殘されて居る重要問題の内、少くとも動機の改造といふ

事だけはこのまゝ葬り去る可きものでない事を近來熟々感ずるのである。勿論、經濟的壓迫は非常に強く且つ未だ精神的方面を取扱ふほどに經濟學は進歩して居ない今日ではあるが、生活の根本問題はやはり「經濟生活の改造ではなく、其動機の改造である」といふ原理をスマートと共に、私共の「第二の思想」として叫ばざるを得ない。

動機さへ改造し得るならば、自然に道德的改造が行はれて、生活は根本的に向上し得るのである。即ち生活を支へて行く消費は無意味な空費を少くして、未來の富の造り替を大にし、又利己的消費が社會的のものに進化する、其結果終には、經濟生活の本質が奉仕の競争となり相互的奉仕の無意識的協力が社會の本體となるのである。かくしてこそ初めて眞の文化生活が實現されるのである。

幼稚な現今の經濟學の立場から論議する物的文化生活論は、心物兩面を有して居る眞の文化生活論に入る必要な第一思想に過ぎない事を決して忘れてはならぬ。云

ふまでもなく、今日社會はパンに缺乏を感じて居る。我等は奮闘して民衆に夫れを豊に與へなければならぬが、矢張り人はパンのみにて生くる事は出来るものでない。改造された動機の上のみ、美しい完全な文化生活は建設される。だから所謂改造の叫びが聲を偕めんとして居る今日こそ、道德的改造が一層高唱されなければならぬ時である。然りマルクスやリカードと共に、再びラスキンやカーライルに學ばねばならぬ時が來たのである。

三 家庭改造と結婚改造

動機が改造されるならば、人は眞面目になつて、順序正しい進歩の階段を、上るものであるから、必ず家庭生活の改造が問題になる、如何となれば、我國の家庭生活は封建時代の遺物で未だ因襲から脱し得て居ないから、歐米文明國に比較すると今猶百年以上も後れて居る。夫れを其儘にして居いて家庭の集りである社會を改造せんとするのは無理な事ではあるまいか。自己や自分の家庭改造を行はないでも、

改造の聲を高くする事は出来やうが、夫れは鳴る鐘や、乳鉢の類である。自己の家庭がまだ充分にデモクラチックになつて居ないのに、社會のデモクラシーを高唱するのは無意味な事である。内では家庭の女王である可き妻女の人格を尊重しないで、終日高等女中にあらざれば、人形同様の玩弄物に過ぎない様な待遇を與へ、外では下劣な醜業婦人と席を共にする宴會に、有頂天になるが如き不合理な生活を營んだり、或は社會國家の重大問題を待合で論じたり、或は眞面目である可き議事の審議が、喫煙や喫茶等と共に仕だらなくなさるゝが如き、或は不經濟極まる二重生活の浪費を敢てしながら、臆面もなく社會改良を叫ぶが如きは、皆一種の芝居の所作事とより見る可らざるものであるから、其實績の舉らないのは當然の事である。

エルウッド曰く「家族に對する愛着心が發達するものでなければ、より大なる集團に對する愛着心は強くなるものではない、故に、家族的情緒の強い處では必ず強力な愛國心と、社會的同情心が見出されるものである」(Ellwood, Social Problem, P.1)

(c) 家族は自己と社會の中間物であり、家庭生活は社會生活の縮圖であるから、社會改造運動は先づ自己の家庭を實驗室として、其處から始まるべきものである。此の點に注意を拂ふて居ない外的改造運動が行きなやんで居る今日、私共は此等社會問題の正當なる解決を徹底的に行はんが爲に、先づ家庭建設の中心である結婚問題から論究するのは自然の理である。是れ私が茲に結婚改造論を敢てする所以である。我文化の最大缺陷は、婦人が男子に比して能力の劣つて居る事にある。而して、現代文化は個人の人格を尊重し、其自由發達を期する事に基調を有するのであるから、各自は各々與へられた境遇に於て自己の生活能力を完全に發揮しなければならぬ、然るに、我國の女子は未だ男子が文化に貢献した程の、努力を盡して居ない事が否む可らざる事實であるのを悲しむ。

私が曾て婦人勞働の實地研究に従事して驚いた事は、女は男より二割内外安い賃銀をとつて居る事が常であり、男女同一の仕事に従事して同一能率で其仕事高が同

じ場合でも女の賃銀は、男の六割位で満足して居る事實さへ目撃した。而して其理由としては、唯彼等が女性であるが爲めとの事である。然かも夫れが餘り不思議な事とも考へられて居ない。之れ實に社會も婦人自身も女性を卑下して、其の能力は男の六割位のものと思つて居るが爲めであらう。

私は決して女が男と同一仕事をして競争すべきものであるとは思はない。今は分業の世の中であるから、主として女は男と異つた方面に活動する事によつて女の天職を十分に發揮し得られる。假令其活動の方面は異つて居つても、常に男子と同等の地位に女子が立つ事によつて、合力の結果文化の開発を見る事が出来るのである。然るに我國に於ては當然女子のなす可きもの、或はなさねばならぬものに於て、僅か六割位の能力より活用されて居るに過ぎないものがある。主として男子の力によりて築き上げられた我文化は、今殆んど行詰まりになつたかの感があるが、最れを今後更らに開展するには、絶対に女子の活動を必要とする。先進の外國では男女對

等で活動して居るにも拘らず、我國では未だ十分に女子が解放されて居ないから、外國の如く一と一と二の力でなく、一と六割即ち一・六の力のみが用ひられて居る、換言すれば彼れは二人の仕事をして居るのに、我れは二人で一・六の仕事よりして居ないと云ふ事である。是れでは國際競争場裏に立つて勝を占むる事は至難な事であらう、今や婦人の立つ可き時である、男子も是れが爲めに出来る限りの努力を吝んではならぬ、男子は專横を恣にして女子を僅かに半人前のものに畏縮させて置くのは男子自身の爲めにも不利益な事である。

婦人の活動す可き領域は種々あるが、其最も手近かなものは時代の進歩に適應する家庭の建設である、勿論男子も是れに責任を有するのであるが是れは主として女子の本領である、女子が百年も二百年も時代に後れた舊式の家庭に今猶蟄居して、因襲の奴隸となつて居るのは現代婦人としては勿論、男子にとつても大なる恥辱である。而して婦人を現代に活かすが爲には先づ結婚の改造から始まる可く、其結婚

の改造をなす爲に先決問題として我家族制度の改造を必要とする。

四 家族制度の改造

我國の女子を無能に陥らしめた強力なる原因は我家族制度である、此制度は家を基として家長と家族との集團を本體とする制度である、一名是れを戸主制度とも稱する、我民法では戸主の親族にして其家にあるもの及其配偶者は是を家族とすと規定してあるのを見ても、戸主は家族ではなく家族を支配する主體で配偶者等より一段高い地位を占めて居るものである。

故に此制度の下にある家族と、西洋の家庭即ちホームとは大いに異つて居る、ホームは家庭制度の結果、各自は皆家族員で各々自由平等の人格が認められ、妻は妻として子は子とし、夫や父と同様に夫々特殊の権利が認められて居るから、ホームの内には特に家長權を有する者は存在して居ない。我家族制度は專制主義の發現で西洋の家族制度はデモクラシーの發現である、家族制度の行はれて居る間は夫婦は

對等の地位に立つ事は出来るものでない、従つて此制度の下に現代に適應した結婚を行ふ事は不可能であると云つても過言でない。併し家族制度が時代錯誤である事は明かだ、早晩破る可きものである事に就て梅博士は民法要義親族編の中に書いて居られる。「我國に於ては、今猶戸主制を存し、戸主は家族に對し一定の權利義務を有し、其間に自ら一の團體をなせり、是れ社會の進歩と同時に漸次廢滅す可き事項なる事は殆ど疑を入れず」。此制度は印度民族に最も盛で、羅馬でも一時盛に行はれ生殺與奪の權を父が有して居つたのであるから、子を賣り身代りとなす等の事は普通の事であつた、「ブルータスが其子を殺したのは、刑名によらず人と謀らず父たるによりてなせり」との事は有名な話である。斯かる時代に於て結婚の如きは勿論家長の定むるもので當事者の自由は絶對的に認められて居なかつたのは何も不思議な事ではない。

大正の今日斯かる性質の家族制度が存在すべき理由の全然ない事は、此制度の起

因は何處にあるかと云ふ事を知れば明かになる、専門學者の説によると、家族制度の起因は二つある、第一は社會上の原因で「草創の世、政治組織未だ整備せざる時に當りては、弱者は到底獨立して生存するを得ず、僅かに強者の庇護の下に匿れて自己の護衛し、婦人兒子は家長の保護の下に生存を保つに過ぎず……家長が絶対の權力を收め、其下にある家族は一舉一動是れ背かざらん事を虞れ、戦々競々其命ずる儘に動きたるは察するに難からざるなり」

第二の原因は祖先教の影響である、「祖先崇拜は未開人の間には最も廣く行はれたる所にして、死靈は人間界の事物に關係すとの信仰に基き其祭祀は是等死靈の歡心を得其怒を鎮むるを以て目的とす、墓所を大切にし……其共同の祖先の保護の下にある一族は、自ら祭祀を司る家長の下にありて鞏固なる團結をなし、其最も重大事たる祭祀を司る可き家長は、絶対の權力を以て家族に臨めるに至れるものなり」(本莊法學士著經濟史研究三六〇頁)

以上の二原因は今日では共に其必要を認めないのである。時代は其後著しく進歩したのであるから、今となつては梅博士の言の如く當然消滅す可きものであるのに、是れが勢力を逞くして結婚も其支配を受けるのであるから、今日幾多の犠牲者が續出せざるを得ないのである。故に家族制度に更ふるに家庭制度を以てし、家族の各員は互に自由平等の人格を尊重する事によりて、自覺心を發現せしめ、自立自助の精神が活動して各其生活能力を極度に發揮せしめ得る麗はしいホームを建設すべきである。従つて家族制度の精神を無視する事が結婚の改造に必要な第一歩である。

五 婚姻の種類と其發達

如何にして結婚の改造を行ふ可きやと云ふ問題を解決するには、先づ婚姻の過去に於ける事實及其發達の状態を明かにする事が必要である。古來種々と議論の戦はされた此の問題に關する研究を綜合して考へると、先づ、幼稚な原始時代に於て男女間の性慾關係が頗る亂れて居つた事は想像するに難くない。原始人の腦力が幾分

進歩した後に子供の生れる事によつて始めて、男女間の關係が制限されて、一種の結婚が成立する様になつたのであらう、故に結婚あつて子供が出来るのでなく、子供が出来て結婚が成立したものと想像される。而して其後行はれた結婚の制度や方法は随分複雑なものであつたが結婚の制度は大體次の様に三大別にして考へるのが至當であると思ふ。

一、群婚 (Group Marriage) と云ふのは男子の一團 (普通に兄弟) が女子の一團 (普通に姉妹) と結婚して、其團體の各婦人は各男子の妻となるのである。

二、一妻多夫 (Polyandry) と云ふのは男子の一團 (普通に兄弟) が一婦人の夫になるのであるが、是れは餘りに廣く行はれたものでない様であるが、カナリー島の婦人は普通に三人、ホツテントットでは二人の夫を有するのは能く知られた事實である。

三、一夫多妻 (Polygamy) と云ふのは強力で、富んで居る男子が多数の妻を有して居るので、今日でも種々の形式で是れが行はれて居るのを見る、昔ソロモンの榮

華はよく后宫七百の王妃と三百の貴妃を容れたとあり、レホボアム王は法律の許す極度の數即ち十八人の妻と七十五人の妾を有せりとあるが如き記事は少なくない。是等の結婚制度を行ふ方法は、大別すると四類とする事が出来る。

一、掠奪婚と稱するもので、永い間盛に異族間の結婚に主として用ひられて居つた方法である。即ち男子が異つた種族から女子を掠奪して結婚するのであるが、此方法によると尙武の精神が養成されたり、異族の血を混じ、又近親婚をさくる事等によつて健康をよくし、或は一部落に於て婦人の缺乏せるのを調整する等の理由で家長が盛んに奨励したのである。之れ初代のアリヤン人種が最も普通に行ふた方法で今日でもアルーシャン島やカリホルニヤの土人の或部落では類似の結婚が行はれて居る。

二、賣買婚と稱するもので、掠奪婚が平和手段として變形したものである。即ち暴力によらず双方合議の上、相當の賠償物を提供して妻を購買するのである、例へ

ばニューメキシコでは拔群の美人を妻とするには馬十二頭を要し、亞弗利加では安價な妻は牡牛五頭乃至十頭、高價なのは三十頭を要し、又カロリン群島では僅かに若干の果物及魚類を以て容易に妻を求むる事が出来た、又時には父が娘を競賣に附して最高の評價をした男に何等の條件をもつけずに娘を渡す場合もあつた、而して娘の價格が餘りに高い爲に一生獨身で暮す者がテツケ、チュルコーマンスで見られると書いてあるが、我國では同様の事實が今日でも屢々見られる。

三、贈與婚と稱するもので、賣買婚が發達したものである。特に賠償として物資を提供するのではなく、娘の父は夫たる可き男から相當の贈物が提供される事によつて娘を與へるのである、支那及日本等では極く普通に行はるゝ方法である。

四、共諾婚と稱するのは最も發達した方法で今日歐米文明國で普通に行はれて居る。即ち男女各自が互に承諾する事によりて結婚が成立するものである。

現在我國で普通に行はるゝ結婚は、表面は共諾婚であつても事實は賣買婚と贈與

婚との雜種である、勿論昔の様に露骨に金錢での賣買は行はれないが、結納の交換される事、結婚仕度を重視する事、或は本人の意志を重んじないで、他人が結婚の決定權を有するが如き事等は、皆今日の結婚が商賣化されて居る事を證明して居る。更らに男女間の社會的需要供給の關係が變化する事によつて、花嫁の方から賣るのを急ぐ必要が起る場合もある、其結果として、持參金制度までが起る様になつた。ウエスターマークが「結婚持參金を有せざる者は現今でも、青年女子が特に力強い引き付ける力を有しない限り生涯獨身で暮す危險を有す」と書いたのは僅か二十餘年前の事で、我國では其の様な事實が今日少くない。

かゝる商賣的又は壓迫的の結婚が、改造されて共諾婚に進むのである、之は單に當事者同士が互に承諾を與へるのみでなく、夫れが法律で承認される事によりて成り立つ婚姻である、故に法律論としては「婚姻とは當事者双方の合意による一男一女の終身的共同生活關係を法律が承認せるものを云ふ」(穂積博士婚姻制度論ニ依

ル。此の定義に基づいて、我國現行の婚姻を批判すると種々の缺陷があるから、現代に活きんとする者は、舊慣を破つて根本的に改造する必要を自覺するであらう。

六 結婚の慘虐史

結婚の歴史は女子が男子から受けた一種の壓迫史の如き觀がある、従つて裏面から觀察を下すと、結婚の發達史は妻の權力發達史に外ならない、今日猶夫は妻の人格を尊重せず、物品取扱にし、妻の地位が夫よりも一段低きものとする習慣のあるが故に、對等の立場で共諾婚を行ひ得ないのは全く過去數千年間の歴史的產物であると思ふ。

今女子が如何に人格を無視され虐待されて居つたかの實例として二三の事實を記述する。

先づポツクによると、女子は男子の共有す可きものであるのに、若し特に妻を獨占するを欲する者は、先づ一種の代償的行爲をなさねばならぬ、其の行爲とはリビアンLibyanのナサモニアNasamonianオーシレー等に見る如く結婚の當夜は招かれた客に *jus Primæ noctis* の權があるとか、又ペロー國マンタ地方では新婦が先づ新郎の知友親戚の意に従ふて結婚當夜を過す事を條件として結婚が行はれるとか、或はバレークツク島の土人の如く、結婚の當夜女は全く招待客の權利に屬し第二夜より初めて夫の所有となる風習があるとか、或はブラジル、ニカラガ地方に行はれる様に結婚の第一夜の權利が會長或は僧侶にあると云ふ様な事實は少くない。

以上は極端な例であるが夫等の惡習慣が今猶我國に於て働き結婚が女子に少からぬ慘虐行爲となつて居る事實は必ずしも乏しくない、近世史に之を見ても徳川時代女子に所謂三從七去の教あり、女性には殆ど權利なくして、唯義務のみあり恰かも物品の如く取扱はれ、男子は蓄妾するを適當と見做され、女子には極端に貞操を要求せり、實質に於ては如何にあれ少くも表面に於ては、女性を壓迫し苟くも女子に對して溫顔を示さず、唯嚴平として臨むを以て男子の禮義と信じ——殊に武士の

階級に於て然り——夫妻は全々主従の關係にして、腹は借物の諺の示すが如く自己の産める子に對してさへ、親權を有するは父に限り母は既に戸主となれる其子に對しては、従者の如き關係を保てるが如き極端なる男尊女卑も多年の習ひをなして、毫も怪むものなく、其原因の儒教にありや將た或る論者の云ふが如く戰國時代の産める現象なりやは今暫く論せず、兎も角も斯くの如き状態に對して、女性自らも何等反抗心を起す事なく、唯天の定めたる法則の如く遵守せられ來たるなり」〔清原文學士著明治時代思想史に依る〕

更に福澤諭吉氏は「日本婦人論」に於て論じて曰く、「我婦人の體質が一般に弱きは一は婦人が全く男子に隸屬して、責任ある地位を與へられざるも其一因にして、一は女子があらゆる點に於て感情満足を與へられず、殊に性慾の事に關して最も甚だしい、即ち男子は多妻(蓄妾)を公然容認せられ、是れに反して女子は一婦兩夫に見えずの教を、其夫の死後に迄も擴張せられて再婚を婦徳に背ける行爲と認められた

る事によつて、寡婦はもとより現に人の妻妾たる者と雖も十分に性慾満足を得るによしなく、怏々として日常を送るもの多きが故なり」

七 戀愛と結婚

以上列記した事實は、徳川時代又は明治時代の男女關係を示せるものであるが、其後著しく變化した現代に於て、殆ど同様の關係が殊に上流社會に於て重んぜられて居る。従つて年々幾多の不幸な男女が、不自然の結婚制度によつて、戀愛の結婚をなす事が出來ず、種々の方面に哀れなる犠牲者となつて葬られるのである。

抑も婚姻は人生に於ける最も楽しい出來事であるのが自然である、青年男子が地上で最も莊麗で光榮あるものとして考へるのは、若い婦人に關するものであると云ふのは正直な告白である。而して人力以上の魔力を有する戀愛の紐で、「我」と「汝」が接近させらるる時に恰も陰と陽の電氣が働くと同様に、清い戀愛の火は炎々と燃へ上るのは自然の作用である。此力強い勢力で結び付けられた結婚程尊いものはな

い、是れのみが男女對等の共諾婚を終生樂ましめ得る力を有するのである。戀愛の結婚は即ち自由婚であるから、他人の忠告や助言は十分に尊重す可きは勿論であるけれ共、最後の決定權は當事者双方に保留して置くのが原則であらねばならぬ。彼が双方の合意によるに非ずして、一男一女の終身的共同生活關係が完ふされ得ると思ふのは大なる誤である。假令両親、親戚、朋友でも此點に關しては無能力で只第三者の地位を占め得るに過ぎない。

人生否社會全體の幸福を最大にするが爲めに、清い戀愛の結婚をする花嫁の將來を祝福す可く私は今英國で普通に用ひらるゝトリストを捧げたい。

「愛よ彼の女に誠なれ、生命よ彼の女に親愛なれ、健康よ彼の女を離るゝな、喜悅よ彼の女に近くあれ、幸運よ彼の女の爲めに汝の寶の藏を隈なく搜して彼女に最善を盡し、廣い世界の何處までも、彼の女の踵に着き纏ひ、彼の女の郎人を終生の戀人たらしめよ」

若し愛の結婚が合理的に行はるゝならば、斯くの如き祝福は實現され——少くも實現される可く理想に活て來る——初めて家庭も社會も自然に正しい幸福なものに改造されるであらう。戀愛の力は改造の原動力であると云ふのは是れが爲めである。

然るに今日戀愛と性慾とを同一視せるかの如く、舊い習慣性で、其尊い愛の力を押へ付けんとするのは無法も甚だしい事である、若し適當なる境遇で戀愛が十分に精練される時には、戀愛の神聖なる性質は立派に發揮し得るのである。

トイフェルस्टレッケのブルーミン(戀人花子)に對する熱烈な次の様な戀愛が満足され、夫れが適當に指導されて發達するならば、因襲主義の不自然な家庭や社會が自然に改造するに至る事は想像するに難くないであらう。

「彼女の優雅ではあるが莊嚴な姿、微笑と陽光とが不可思議に満ちて居る彼女の顔に垂れかゝる房々した黒いカール、是れ等はすべて實體のない幻影で、彼の近寄る可らざる者と思ふて居つた、彼女の領域は彼れと餘りに遠く離れて居るの

で彼女は彼れに思ひを寄するが如きは有り様筈はない、まして二人相會するが如きは、オー天よ！絶対に不可能の事であると彼れは諦めて居つた、然るに今あの薔薇の女神は彼と同場所に席を占めて彼女の目の光りは彼の目の上に笑ひ、彼れ語らば彼女は是れを聞くのである、否な天の太陽は最も低い溪谷を照らす事を思へば、或はブルームン自身も此の微々たる自分に注意を拂ひ居らない其限らない、恐らくは彼れの反對者から——彼れが彼女の反對者から聞く様に——彼女は彼に對して驚きの念や同情の念を寄せ集めて居つたかも知れない。然らば恰も極と極とが接觸せんとする時に振ふが如く、今二人が近く相會した時に、引きつける力と心の騒亂は相互的であつたかも知らん。月が近づく時海洋の張り上るが如く情緒は心霊の女王の面前に張り裂けん許りであつた。而かも彼れは漂浪者として猶更の事、天上に向へる引力の様に、天使セラフの魔法杖に觸れた様に、俄かに、彼れの全身全靈は幽奥より目醒めてすべての苦しみも楽しみも、あらゆる過去

及未來の影像も感情も、今は彼の心の内で渦巻き亂れるのみである」(Furtor Beatus P. 97)

戀愛の自然作用を人が勝手に束縛するのは恐ろしい弊害を生ずるものである。ロスの社會學を見ると次の事が記してある。支那人は人生から求婚、戀愛、戀物語、を除去して結婚は全部兩親の手によつてなされ、新郎新婦は結婚當日初めて双方の名前や顔を知るのである。従つて結婚後不調和が起る事は甚だしいが、すべての犠牲は妻によつて拂はれるのが普通である。故に自殺は男子の方が女子より三四倍多いのが米國では普通であるのに、支那では反對に女子の方が四五倍多い」

(Ross: Principles of Sociology. P. 443)

不自然で當事者間に理解もなければ愛もなく、唯金錢、地位、家柄等を目的として成り立つた結婚の悲哀の大なる事は幾多の實例が有力に物語つて居る、何とかして涙の結婚から喜びの結婚に入らしめぬばならぬのであるが、夫れには今日の如き、

形式的、因襲的結婚を改めて戀愛の自由婚とするより他に方法はない。是れが自然の人類に對する法則であると思ふから、社會改造の基本として結婚を自由戀愛の上に成立せしむ可き事を主張するのである。

八 戀愛共諾婚の危険性

戀愛共諾婚を行ふに當りて、我國の如き社會事情を有して居る處では甚だしき危険性を有して居る事を忘れてはならぬ、夫れで此の結婚を成立させるには絶對的に少くとも次の二條件を具備する事を必要とする。

- 一、男女共に能率増進に最善を盡し、且つ夫婦の能力に大なる優劣のない事。
- 二、男女交際が自由に且つ廣く行はるゝ事。

先づ第一條件に就いて考ふるに、戀愛は神聖なもので魔力を有して居るものであるから、人の能力の如何によつて束縛を受けるものでないと考へるのは大なる誤りである。すべてのものには光明の方面と闇黒の方面との二つがある、戀愛の闇黒面

には著しい不定性と異常性が存在して居るから、若し血氣の旺んな青年が自制心に乏ぼしく、合理的判斷力を缺いた場合には如何なる非常識な行動に出づるかも知れない、戀愛は自由である可きものであるが放任す可きものではない。其本來の性質が如何に神聖な戀愛でも、時には、不定性や異常性が働いて我儘であつたり、不法な考が起る場合もある其の時に夫れを放任しないで理智や道德の力で、自制し訓練を加へる事によつて初めて戀愛の神聖を保持し得るのである、男女共に精神的修養に最善の努力を盡して確乎たる道德力を有するのでなかつたならば戀愛は意外な不幸を生ずる場合が多いことを忘れてはならぬ。

例へば既に妻あり夫ある人でありながら、他の男女に一時の氣まぐれで戀愛關係を起す様な氣持になつたり、或は公然と不正な關係を結ぶ人があるが、夫れは、多くは一種の色慾狂者でなければ、理智の缺けた放縱者又は我儘者である、決して自由戀愛として尊重す可きものでなく、不法なもの又は野獸性な帯びたものとして極

力排斥す可きものである。

戀愛の偉大なる力をよく、制取して幸福な結婚生活を完ふするには男女共に相當の能力を要する事は勿論であるが、若し夫婦の能力に著しき差異がある場合には、對等の結婚生活を終身續ける事は困難である、故に戀愛の結婚を行はんとする者は、殊に女子に於て自己を教育して能力を大にする事に最善の努力を拂ふ可である。

九 妻女の教育

女子の教育に關しては結婚前の教育と、其後の教育との兩者に就いて考慮しなければならぬ。現今中流又は知識階級の主婦として任務を完ふするには、普通の高等女學校程度の教育では不十分である、必ずしも學校教育による必要はないが、何等かの方法で將來獨立し得るだけの教育を受くる事が肝要である。若し主婦の能力が低くして經濟的に永久夫により絶がる必要があるならば、自然、進取の氣象が鈍り、尊い獨立心を失ふ様になり、夫婦對等の地位に立つて時代と共に進歩する家庭生活

を送る事が出来なくなる、實際に於て婦人が經濟上獨立心の必要が起らないとしても、必要に應じて獨立し得る確信を有するだけの、素質を有する事は結婚生活を生涯樂むに最も必要な事である。

結婚後の教育に就いて考ふるに、今日普通の境遇に於ては前述の如き結婚前の教育を受ける事が困難である場合も少なくないから、夫れを結婚後に於て補充する事が必要なのである。然るに一度結婚すると「片付」いてしまつたのであるから萬事終れりと云ふが如き有様で、世話女房として家庭の雜務に忙殺されるのでなければ、所謂新らしい女として家庭を輕蔑し懦弱な文藝や、浮薄な社交に憂き身をやつすと云ふ状態で、何等自己の訓育に努力して進歩をはかる事をしないのである、進取の精神に缺けて居る事程、家庭生活に不利益な事はない、例へば結婚前に高等な教育を受けた人でも休みなく時代は進歩して居るのであるから、結婚後に於て引續いて自らを教育するのになかつたならば、忽ち時代にとり残されて保守的退歩的生活を

送らねばならなくなる。

外國では反對の例が多いのであるが我國では普通に妻の智力又は道德力が夫よりも劣つて居る、従つて結婚後に於て夫が妻を廣き意味で教育して其向上を計る事は妻の爲には勿論の事、夫自身の爲にも必要な事である。然るに事實は是れに反して妻を女中か、人形か、子供の製造機械の様な取扱をして居るのが普通であるのは、甚だしく社會の進歩を害する事である。若し結婚後に於ても新たな境遇の下に終身向上策を夫婦共に講じて自己の爲め、又社會進歩の爲め努力するのなかつたならば、共諾婚も何等意義を有しないものになる。

十 現代妻女の模範者

私が曾てホーランダー教授の宅で、毎月一回開かれた經濟演習セミナーに出席して居つた時、同教授の夫人も——今は故人となられたのであるが——必らず出席して、其研究の報告や討議を謹聽された、共に語り共に演習後の茶菓レフレッシュメントを食しながら、學者や學

生等と如何にも楽し相に交はつて居られるのに私は注意を拂はずに居られなかつた。同夫人の言はるゝには「斯くの如くにして進み行く學界の思潮を理解するのなれば、夫君の經濟研究の努力に同情をする事が出来なくなるから、自分も出来るだけ機會を利用して新進の學問を勉強する事に勉めて居る」との理由を聞いた時に私は熱々ミルの妻君に關する書物を讀んだ事を思ひ浮べて、進歩的な妻女の心掛の立派なのに深く感じたのである。

ジョン、スチュアート、ミルの妻君は有名な賢夫人で頗る理智に富んで觀察力の強い人であつた。而して高い理想の實現の爲めに夫君ミルを精神的に常に上へ上へと誘導する事に全力を盡して居つた。ミルがあれだけ偉大な貢獻を經濟學界になし得たのは、夫人の助力あつて初めて出来たのである、従つてミル自身も婦人問題に大なる知識と理解とを有する様になつた、彼れは持論として次の様に考へて居つた。婦人の天性は實に立派なものである。然るに婦人の天性に關して批難する者の少

くないのは、皆習慣と因襲とに基くもので實際の経験から起つた考へではない。若し婦人の發達を害する障害物を除去し得るならば、婦人本來の眞價は現はれる、故に夫等の障害物を除いて婦人にも男子と同様の權利を持たせなければならぬと。

是れ實に私等の共鳴する言葉で、若し女子にも男子と同様に其能力を十分に發揮し得る境遇を造り與へるならば、今日の如く妻は夫の附屬物であるが如き状態から脱して夫婦同等の立場に愛の力で結ばれて、合力の勢力を利用し夫婦關係が年と共に次第に進化して社會改造の中心となり得るのである。

十一 結婚改造に必要な事項

以上の精神を基調として結婚の改造を行ふに當つて、我國では是非必要とする事項を列挙すれば、特別の場合を除く外は、次の如くである。

一、進歩的で研究心に富んだ夫や妻を撰ぶ事、之れは健全な結婚生活を終身樂しまんが爲に、相當の能力を有する事と共に必要な事である。

一、早婚を避くる事、共諾婚をなし得る素養をつくるには相當の年數を其準備の爲めに必要とするのは當然の事である。

一、結婚後主婦が教養の時間を出来るだけ多く造る爲めに、家庭生活を改造する事、例へば食物、衣服、住宅等を合理的のものにして、時と經費の節約を計り、或は二重生活を改めて能率生活にするが如きは、差當り實行を急ぐものである。

一、産兒の數を自己の經濟事情に適合する程度に制限する事、未開人類のやうに^{（人）}出産を自由放任するならば、殊に妻は^{（子）}子供製造器、又は^{（養育）}養育機械に變化して、文化人としての進歩發達は出来なくなり、子供の爲、又親の爲、ひいては社會の爲に不幸を來たすに至るものである。

一、物質的の所謂「結婚仕度」^{（下の階級の人は）}を殆んど全廢する事、之れ結婚に眞に必要な仕度に^{（中へは）}重きを置く時に當然なざるべきことである。

一、野蠻の風習である結納の交換を廢して、當事者双方の神聖なる約束を以て是

れに代ふる事、而して若し事情が許すならば、男女共に誠實なる醫者の健康診断書を約束前に交換する事を望み度い。

以上は必要と思ふ事を、順序不同に列記したのであるが、皆前に論じた共諾婚をするに當り、必ず考へなければならぬ事であると信ずる。

更らに進んで共諾婚を行ふに當り、考慮すべき事項の輕重に就いて一言せん。

昨年「親たるに必要な標準」を定むる爲めにフィラデルフィヤ市で開かれた大會の決議は、左記の如きものであつた。勿論かゝる標準を數字で採點するが如きは、不可能の事であるが結婚改造に關する注意事項の一つとして、心得て置くのは、無益な事でもあるまい。

- 一、相互的愛情 二十點
- 二、遺傳の正しき事、及生れつきの健康 二十點
- 三、經濟生活に必要な所得 十五點

- 四、物質的發達に對する知識及責任 十點
 - 五、心的發達に對する知識及責任 十點
 - 六、道德及宗教的發達に對する知識及責任 十點
 - 七、法律上正しき事 十五點
- 計 一百點

(Standard of Parenthood by A. E. Watson)

十二 男女の交際

共諾婚を行ふに必要な第二の要件は、男女交際を自由にし、且其範圍を廣くする事である。若し此條件を缺いて居る場合には、種々の危険が伴ふのである。華族の令嬢が、運轉手や書生と家出したとか情死したとかいふやうな悲劇を、我國では大小無數に起つて居るが、多くは男女交際の範圍が狭いが爲めに選擇の自由を有して居なかつた結果として起つたのである。男女は幼少の時から親密に交際して、一

生涯其交際を續くべき性質のものである。けれども我國の如く舊思想が勢力を有する處では、小學校時代から此方面の訓練を適當な手段で與へる事が必要である。

若し其方法を誤つて、訓練されない自由交際が行はれた時には、却つて大なる弊害を生ずるものであるから、今爰に簡畧に考察を下す事を避けなければならぬ、故にこれは他日改めて『男女自由交際論』として、詳細に亘り論議する事にして筆を擱く。

九 結婚生活の悲哀と産兒制限

犬か猫の仔を貰ふたりする様に、唯一二回の見合ひで、花嫁や花婿をやりとりする習慣が、我國では未だ行はれて居る。此種の結婚は大なる僥倖性を有して居るだけ夫れだけ、恐ろしい危険性を伴つて居る。恰も籤引の様なものである。人の本體である個人の人格は、先づ肉體で深く包まれた上に、更に種々の被服或は紅や白粉で、巧みに飾られて居る。殊に不誠實な言語や身振りを弄する者が多いから、甚だしく表裏のある場合が多い。僅かに一二回の會見や第三者の觀察によつて、自分の個性に適合する他の個性を洞察して、人格の結合の上で結婚生活に入る事は、至難の業と云はねばならぬ。

勿論、偶然よい籤を引いたと喜ぶ花婿もあらう、が其籤はとりもなほさず、花嫁

に取つては悪むのが普通であるから、社會全體から見た總勘定では、結局不幸なものである、云ふまでもなく眞の結婚は、本人同士の選擇によつて出來た自由戀愛共諾婚でなければならぬ事は、前章に於て是れを詳論した通りである。

數日前の雛祭りに際して自宅の女兒に、人形を買ふて遣らうと思ふて雛店に這入つた。種々の顔をした人形が様々に着飾らつて、ヅラツと並んで居るのを見た時に假令小さな女の子でも彼女の個性を何より尊重して居る自分には、こんな小問題に對してさへ遂に自分で選擇する氣分になれないで、子供自身で選ばす事に仕様と思つてむなしく其店を出たのであつた、況んや、生きた青年男女一生一度の選擇を當人以外の者が勝手にするが如きは、随分危険な冒険であると思つて恐ろしく感ずる。

かく言ふものゝ、自由戀愛共諾婚を行ふに必要條件の一つである、廣く男女自由交際を行ふと云ふ事は、現代社會で未だ充分に許されて居ない。又、かゝる共諾婚

をなし得る程度まで、當事者の人格が訓練されて居ないと云ふ理由が主となつて、矢張舊式の結婚法が廣く行はれざるを得ないのである。勿論此方法で結ばれた者でも、若し當人が進取の氣性と適應性に富んで居るならば、彼等は次第に、新しい環境を開拓して、進歩した結婚生活を營む事が出来る。けれ共さうではない場合が少くないから、結婚生活に悲哀が付き纏ふて來るのである。而して、其犠牲となるものは、單に當人ばかりでなく、社會全體が大なる害を受くるに至る事を記憶せねばならぬ。幸多かる可き結婚生活に種々の悲哀が付き纏ふと云ふのは、實に不自然な事で、是れが爲めに、生活の能率と幸福の増進を根本的に阻害して居るのであるから、今此問題をとらへて論議せんとするのは大切な一種の文化生活運動であると思ふ。

二

結婚生活の悲哀を大別すると二つになる。一は他動的に觀るもので、不完全な社

會及び家族制度等が、其主なる原因となつて居る。人格よりも資産、個性よりも外見、道理よりも情實習慣が貴ばれて居る現社會制度の下に、不自然な方法で始まつた結婚生活に、多くの不自然の結果を生ずるのは、止むを得ない事であるとは云へ、最も樂しかるべき結婚當夜から、花嫁が泣いて悲しんだと云ふ様な、白蓮燐子式の實例が我國には少なくない。物珍らしい夢の様な結婚の初期が過ぎ去つて、眞面目な家庭建設に苦心し初める頃から、夫婦間の關係が次第に不調和になり、遂には法律的或は精神的に、夫婦離別するに至る者は何も珍しいことではない。表面睦まじい夫婦を粧ふて居つても、其内面に於て、妻女が人格を無視され、因襲の奴隷となつて、高等女中にあらずんば玩弄物の如く取扱はれて居る事に自覺した時に、深夜人知れず血の涙を流して居る可憐な婦人も少くない。新時代に生れた婦人として當然樂み得べき人権が蹂躪されて居る間は、其の結婚生活に於て、夫婦共に幾多の悲哀を嘗めなければならぬのは當然の結果であらう。併し是れは或程度迄社會の罪で

あるから、其の組織制度の改革が、當事者夫婦の覺醒と共に行はれなければ如何ともなし得ない事である。

三

是れに反して第二種の悲哀は、自動的のもので、全く夫婦自身の無思慮不謹慎の結果として起るのである。此種の悲哀の中で今茲に論究せんとするのは家族の數が過大であるが爲に、結婚生活の能率が高まらず、幸福が減じ以て生活の悲哀が起ると言ふ重大な社會現象である。英國で、ロントリーが貧の原因に就いて研究した有名な論著に依ると、貧乏になる原因を澤山に擧げて居る内で、第一位のものは、一家収入の少ない事。第二位は大家族即ち産兒の數の多い事である。而して第一の収入の少いといふ事の主なる原因は、つまり家族が大であつて、生活に不自由が起つて健康を害し、次第に能率の多い勞働に堪へられなくなつて、其結果収入が少くなるのも有力な原因であるから、結局第二の大家族が其因をなして居ると思ふ。尙

ロントリーは過大の家族を有する労働者は、一生の内でも最も大切な少年時代、壯年時代、及び老年時代の三期に貧乏線下に落ちて貧の苦しみを受ける不幸な運命に支配されるといつて居る。如何となれば少年時代には幼少な兄弟姉妹が續々産れいづるから、其家計は苦しくなり、其の家庭では、不完全な養育を受け、貧苦を味はねばならぬのである。壯年時代になると、親兄弟と共稼ぎをして居つたのが、獨立の家を持つやうになり、數年すると今度は自分の子供が多くなつて又家計が苦しくなり、自分等の生産能力は減少する。而して最後に安樂な老後を送り度いと思ふ時には、子供は家を去つて獨立の貧乏生涯を始めるから、三たび貧乏線下に落ちて遂に貧死をもつて終るのである。以上は自分の能力を顧みないで、性慾満足を恣にせんとする野獸性を發揮する無産階級者が、當然歩まねばならぬ人生の曲線はかくも悲惨なものであることをよく示して居るのである。而してロントリー以後の研究もやはり同様の事實を科學的に證明して居る。

去りながら、若し結婚生活を送るものが、産兒の粗製濫造の害を充分に認め、夫婦合力によつて結婚生活の能力を獨身生活に比して數倍の多きになすべく最善の努力を吝まないならば、自然彼等は自發的に産兒に制限を加へる事が出來て、出産に伴ふて生活の標準を低下する必要なく、健全な人口の増加を來すことが出来る。かくの如くして第一種の結婚生活の悲哀が除去されるならば、次第に第一種の悲哀もなくなるやうに結婚改造が行はれ、健全な家族生活が營まれるやうになり、延いては社會が根本的に改造されて人類の向上が實現されるに至る事と信ずる。

四

時代精神は絶へず變化してゆくものであるから、一定の社會に適應して出来る主義は其時代には美しいものである。併し時代が變遷して次の階段に社會が進んで來ると同一の主義でも時代に適しないものとなり、更に新しい時代精神に適應する主義がよいものとなつて現れて來る。かくあつてこそ社會は進化し得るのである。

十九世紀の時代には、軍國主義や資本主義が最もよく時代精神を現はして居つた。従つて夫れに準じて出来た此社會組織や制度等によつて社會は著しく進歩した。夫れで夫等の主義は其當時最善のものであつた。けれ共二十世紀の今日になつても同様に考へて、他の新しい主義や思想を排斥するのは、新社會の原則を無視するものである。

軍國主義の行はれて居る時に、其國家を支へて行くに第一に必要なものでは多數の兵士であつた。而して其兵士は雨霰と降つて来る彈丸を物ともせず、突撃して肉弾となる事を光榮とする精神を有して居なければならなかつた。即ち或る意味に於て自己の生命又は人格を無視してまでも、軍國主義の犠牲となる事を喜ぶ精神が必要であつたのである。が人間の進歩は、自己の生命と人格とを次第に尊重する念が漸次強くなつてくるのであらう。今日では、精神的に従前の様な軍國主義は成立し得なくなつて居る。夫れで現時に於ては軍國主義を時代精神に反する惡主義と認

め、世界文明國の協力に依つて是れを廢棄せんと勉めて居るのである。

かゝる時代に處しては、國民は最早從來の様に多數兵士の供給を要求されて居るのではない。一家を犠牲に供してまで獎勵した多産主義は世界平和の曙光が見えると共に葬ひり去られた筈である。即ち人口の數に重きを置いた。古い人口論は破れて、人口の數よりも質に重きを置く新しい人口論が主張される様になつた。斯く外部から多産を強いられる理由がなくなつて來ると、理智に富める人は自發的に自分の能力の如何を考へて、産兒の數を適度に整理する知識と勇氣を有する様になる。

五

勿論今日でも産兒制限の如きは不自然な事で、人道に反するものと考へて居る頑愚者もないではないが、夫れ程不自然な愚論はないと思ふ。元來人の性は實に強力で放從な野獸性を有して居る。決して自由に放任して置く可きものでない。理智の力によつて、其性慾を或は其満足行爲の結果を整理し、以て性慾と食慾との調和を

保たしめる所にして人として價值が存在して居る。

資本主義の經濟が行はれて居る現代では、資本家は不勞所得を受くる事が出来て、生活が豊かであるから、多産主義を實行しても、差支あるまいが、無産階級の勞働者は、其生産の結果の大部分が、資本家や企業家に搾取されなければならん様に出て居る社會に生きてるのであるから、自由放任した結果續々生れ出づる多數の産兒を社會に役立つものに養育し得る餘裕を有して居ないのは、不思議な事ではない。かゝる經濟的壓迫に無頓着で多産さするのは、一種の野蠻行爲で、文明人の恥づ可き事である。故に私は産兒は劃一主義で制限 (Limit) すべきものではないが、己の經濟事情の如何によつて適度に整理 (Control) すべきものであると思ふ。ジョン・スチュアート・ミルは次の如く言つて居る。

「人類が思慮淺くして、野獸的本能に従ふから、他の社會的害毒と同様に貧乏が存在する。併し必ずしも人は野獸ではないから社會は存在し得るのである……………過

大な家族を作る事が、酩酊或は其他の放逸と同様に認められる迄は道義的改良は望む事は出来ない……………産兒の數を決定するのは人意によるものでなく、神のみむねであると考へて、結婚した人には子供が雨の如く天から降り下るものであると考へるのは、大なる誤りである。」

六

ジュリアス・ウルフは人口増加を歴史的に三期に區別して居る、第一期は自然状態の人口政策 (Bevölkerungspolitik der Naturstandes) の行はれた時期で此時代には産業が未だ發達せず生存の資料に限りがあるから、人口の増加は人類の不幸を來す事が大である。故に不生産的人口、又は望ましくない人口は自由に間引(殺)いて、自然の供給する生存資料と人口の調和を計るのである。

第二期は宗教的文化時代 (Epoche der Religionen Kultur) と稱すべき時代で「生めよ、殖えよ」の教を守り多産主義が極端に尊重され、人爲的に人口増加を抑制す

るが如きは嚴禁され、人口の質を問ふ暇なく唯其の數の多いのを以つて國力發展の要素と考へて居たのである。

第三期は宗教又は社會的の觀念を超越して經濟的に、子女の數と生計の状態を適應せしめんとするのであつて、是を解放時代 (Stuf der Emanzipation) と稱して居る。

第二期の「生めよ殖えよ」主義、の歡迎されて居つた時代に於ては産兒が多いから妻女は引き續いて妊娠、産褥、乳養等に忙殺され、殆ど子供製造機械に化する。従つて日常生活の内に餘裕を見出して、婦人自身が文化の恩恵に浴する能はざるは勿論、夫に對して内助の責任を完うし得ない。又かゝる兩親を有する子女は多産の結果、次第に生活の標準を下くする必要あり、兩親の保護が充分行き届かないやうになるから、乳兒の死亡率、病死、夭死、等が多くなつたり、又低能兒が出来たりする様になる。然るに斯かる状態から解放されねばならぬ必要を自覺するに至つて

人爲的に避妊、墮胎、殺兒等の積極的防止が行はれ、夫れと同時に、性慾の抑制、移慾其他の方法で、消極的防止が行はれるに至るのである。而して夫等の方法は道德觀念及學術の進歩に伴ふて次第に改善され、今日では衛生的にも亦道德的にも是認され得べき方法が発見せらるゝに至らんとして居る。

私は曾て Dr Stopes: Married Love と云ふ珍しい書物を讀んで驚いたのは、結婚生活を送つて居る婦人でありながら、女性としての性慾が自由に満足されないが爲めに、神經衰弱症になつたり、其他健康を害して夭死するものが少くないとの事であつた。夫れに加へて、更らに子供製造機械の如き生活を送つて身心の疲勞甚しく、自己の健康を害し生命の短縮を招いて居る者が多いと云ふ事實を知つて、益々婦人の結婚生活には恐ろしい暗黒面の存して居る事を知つたのである。夫れで思慮が足りず、不謹慎な結果、健康の勝れない婦人に多産を餘義なくさせるのは、精神的には勿論、肉體的にも一種の殺人罪を犯すものであると警告を與へねばならぬ。是れ

實に人生の最大不幸であつて、是れ以上の悲哀は他に思出されないものである。

斯かる奴隸的時代が今日解放時代に移り變つたのは人類社會の進歩を意味するものである。一方に於ては人口は無制限に増加して止まない。他方に於ては生活資料を供給する自然か、地力漸減法則の支配を受けて次第に其生産力を減少して行く。加ふるに現代産業發達の結果勞働の能率が一層重要視される様になつた。かゝる環境を有する現代人が遂に人口を社會及自己の經濟能力に應じて合理的に整理する必要を自覺するに至つた事を私は文化の爲め悦ぶのである。

人口が生活の資料に適合する程度に制限されなければならぬ今日、若し人智が發達して自發的に最も害の少い方法で、産兒を制限し得るならば、他動的に起る方法例へば戦争、病氣、殺人、短命其他複雑で慘酷な破壊的方法によつて人口の制限を受くる必要はなくなる、夫れで私は産兒制限は若し其方法を誤らないならば、人口を制限して其質を優良にする最善の方法であると信ずるものである。

七

マルサスは世界各國に於ける、人口と食物との増加の關係について研究した結果大體左の様な人口の原理を發見した。

人の性慾は食慾よりも強いのみならず、土地には制限があるから、人口の増加率は食物の増加率よりも著しく大である。而して此性慾と食慾の二ツの不同な力の平均を保たしめるが爲には、人口増加を妨げるものゝ存在が必要である。其妨げの方法は動植物類では種子の浪費、病氣及天死であるが、人類では罪惡 (Vice) と貧窮 (Misery) である。此二つの障害物があるから人はどうかこうか生活して行かれるのである。従つて貧窮は必要なものであり、又社會に罪惡の存在して居るのも止むを得ない事である。是等は除去し様としても、なくする事が出来ないのみならず、其存在が社會生活に必要なのである。マルサスは斯くの如く考へて居つたが、人口論の第二版以後に於ては、人口の増加を妨げるものは罪惡及び貧窮の外に更に道德的

抑制(Moral Restraint)を加へて居る。道徳的抑制とは不正當な性慾満足行爲の伴はない様にして結婚を抑制する事を云ふのである。若し結婚をしないでも、不正な方法で性慾を満足すると、夫れは罪惡であるから、道徳的抑制ではない。

夫れでマルサスは考へるのに、國民が道徳的抑制を行ふ結果として、各自が自分の力で家族を支へ得る能力を有する迄は結婚をしない様にすれば社會は自然に改良される。故に各自理智を働かして結婚を後らする事が最も肝要であると主張して居る。而して彼の考へでは、道徳的抑制が出来ないで結婚を早くする人は勝手にさするがよい。夫は彼等の自由である、が其結果として貧窮に陥ると云ふ天罰を受けねばならぬ。それは自業自得であるから、彼等を貧窮から救済する必要がないのみならず、それが却つて社會によい刺激を與へる事になる。要するに人口は食物よりも増加率が強いのであるから、道徳的抑制を行ひ早婚をさけて人口過超を防止するの
でなければ、積極的に罪惡や貧窮のために死を多くすることにより、食物と人口と

の調和を保たしめる。而して若し思慮淺くして自分の經濟能力以上に多産を行ふ場合には、必ず天罰を受けて貧窮になるのであると、マルサスは斷定してゐる。

以上マルサスの人口論に關して、今日多少訂正すべき點を見出されて居るが、其根本義に於て、大なる眞理の存在してゐる事は、コツサ、マーシャル、イリー、パレン、コーン等と共に、私はこれを認めてマルサスの主張を尊重するのである。而して其論旨は多産を以て誇として居る我國民が大いに考慮すべきものであると信ず。

八

抑も動物の生殖能力は、神經組織の複雑の度と一定の關係を有して居るのである。即ち生殖力の大小は動物の進化せる程度を示すもので、神經組織が發達すればするほど、出産の数が少くなるのが原則となつてゐる。然るに、*然るに、
動物學者の研究によると、魚類は平均一尾一ヶ年の出産數(産卵數)が六千萬以上であるが、兩棲類に進化すると、約四百に減じ、爬虫類は十七、鳥類は五、哺乳動*

物は三、其内でも人猿類になると一以下に減じてゐる。かくの如く動物が高等になるに従つて、出産数の減少する理由は、主として神経組織が発達することにより、親の知識が増進して、子供の保護が次第に充分になる。だから出産数が少くとも生殖の目的が達し得らるゝが故である。人類に於いても同様に、死率が鋭くない愚鈍な人には、産兒に對して充分の保護が行き届かないために、死亡率が多くなるから豫め出産の数を、必要以上に多くして置いて、以つて生殖の目的を達しなればならないのである。それに反して知識の發達したものは出産数が少くとも、産兒が充分に親の保護を受け、良好な境遇で養育されるから發育がよくなつて、死亡率が少くなる。其結果勞費を最小にして子孫繁殖の目的をよりよく達する事が出来る。同様の事實を、社會生活に就いて見るに、貧富の差違は大體に於いて、知識の差違を示して居るものと假定すると、出産率と貧富の關係は次の如く密接なものである。即ちタウシツヒの著書によると、十五歳乃至五十歳の婦人千人に對する出産の

數は、ロンドンに於て、貧民の生活して居る部落では、百四十乃至百四十七であるのに、富者の住んで居る部落では、六十三乃至八十七に減じてゐる。又ベルリンに於ては、貧民部落で百二十九乃至百五十九であるのが、富者部落では四十七乃至六十三に減じ、パリでは同じく九十五乃至百〇八が三十四乃至五十三に減じてゐる。かかる事實は今日ではより多くの他の統計で裏書されてゐる。

一國全體に就いて考へても、文明の進んだ國では、出産率も死亡率も共に甚だ少いのが常である。最近の統計によると、一九一八年の出産率は、人口千に對して日本は三二・二であるのに、英國は一七・五、佛國は一〇・〇である。かく日本の出産率が高いといふ裏には、死亡率も亦甚だ高いといふ事實が存在してゐることを忘れてはならぬ。即ち佛國の一九・七、英國の一五・八に對して、わが國は二六・八である。故に多産と云ふ事は人口の總勘定に於ては夫程利益のあるものでなく、唯澤山に生んで澤山に殺すと云ふ著しい人生の空費が行はれて居る事を示すのである。ペルチ

ロン (D. Bertillon) に依ると、富者階級に於ては千の出産の内で二十一歳に達し得るものは八六六人であるのに、貧民階級では僅に四八六人に過ぎない。故に富者の出産率は貧者の約半分であるに關はず、大人人口を増加させる力は少しも貧者に劣らないことを知る。

文明の進歩に伴ふて或程度まで出産率の減少する社會的理由として、ブレンタノは次の三つを擧げて居る。即ち

社會の進歩に伴ふて、(一)生殖器病者が増加し、(二)精神病者が増加し、(三)生殖意志が弱くなることに依つて出産は減少するものである。

何故に生殖意志が弱くなるかに關しては、元來子孫生殖の動機は主として性慾と子供の愛によるのであるが、人智が発達すると、生殖意志以上に強力な欲望が発生し、又種々の娛樂設備が充分になつて、性慾や子供の愛心等は或程度迄他に移り去るからであるといふのである。

要するに動物生理學上の原則から考へても、社會進歩の理論から打算しても、文化の進歩に伴ふて、人智の働により、意識的に又は無意識的に産兒の制限は行はれる筈のものである。而して其の制限の程度は自己の能力と社會の經濟事情の適應する點を目標として決定さるゝもので決して固定したものではない。

斯の如く、人類進化の行程に於て當然行はるべき、科學的根據を有する産兒制限論が、今尙墮胎其他の不法行爲と同一視されて、之を非難する者の少くないのは、全く彼等の無智を表明して居るものと考へる。

九

産兒制限運動は近來新マルサス主義の名の下に盛に活動するやうになつた。而してマルサスの人口論が非常な勢で各國に宣傳された時、其の本旨に於ては動かすべからざる眞理を認めるが、晩婚は多くの社會的害毒を起すものであると考へて、マルサスが晩婚奨励に依つて人口を制限する事に對して反對の聲を擧げ始めたのがゼ

ームス・ミル、ジョン・スチュアート・ミル及オーウエン等で、之が將來新マルサス主義を生んだのである。

一八七六年にブラドラフ(Bradlaugh)及ベザント(Beant)がノールトン(Knowlton)の「社會科學原理」と云ふ産兒制限の實行法を具體的に書いた本を出版して盛んに宣傳した時に、終に兩人は法に觸れた。之が動機になつて産兒制限運動は一層盛に發達し始めた。一八七七年に英國に設立されたマルサス同盟(Malthusian League)の會長ドライスデール(C. R. Drysdale)が一八八一年にオランダに招かれた時、阿姆斯特ダム市で講演をした後に、ホウトン(Dr. Houton)の主唱で始めて「新マルサス同盟」(New Malthusian League)が創立された。此の同盟の綱領は

(一)人口過剰に關するマルサス原理に同意する事
(二)マルサスの晩婚主張に反對して、早婚及避妊法の普及を奨励する事

である。尙新マルサス主義の性質を明にする爲め、ドライスデールの一文を譯出する。

「新マルサス主義とは生殖力を制限する事に依りてのみ、貧乏、病氣、及び夭死を除去する事が出來ると云ふマルサスの人口原理、及び結婚をながく抑制すると種々の弊害が生ずると云ふ事の上になてられた倫理的教義である。故に早婚を主張し、産兒の數は、其子供が社會に出で、善良な市民となり得るやうに、両親が満足な遺傳と環境を與へ得る程度に撰擇的制限を行ふべき事を唱道する。而して成年男女が衛生的避妊法の一般的知識を有し、其の知識が啓發された利己心に依つて活用されるならば、自働力で撰擇的産兒制限が行はれ、以て貧困其他の重大な社會害惡が除去されて、人類の向上を誘導するものであると信ずる。」

此の新マルサス運動は一八八九年にドイツ、一八九五年にフランス、一九〇一年にオーストリア、一九〇四年にスペイン、一九〇六年にベルジウム、一九一一年にスキューデン、一九一三年にイタリア、一九一三年に米國に夫々開始され始めた。今日我國に上陸する筈のマーガレット・サンガー夫人は米國でハルマン、エリオット、ロ

ビンソン、ジャコビ諸氏と共に最も有力な新マルサス主義の主張者である。

一〇

私は新マルサス主義に全然賛意を表し得ない點がある。果して彼等の主張する程に晩婚は有害であるか。果して現代の社會事情で早婚を奨励して却て弊害は起らないであらうか。果して一般社會に公然推薦するに足る衛生的避妊法が知られて居るであらうか等は、私は未だ充分に理解して居ない。併し一般學術殊に醫術の進歩と社會の開發に伴ふて、産兒の數を一家族の能力に適應する程度に制限して、優良なる子孫を社會に送り出す事は親たるもの、最大責任であり、斯くする事に依て社會改善の實を擧げ得るものであり、又此等の目的を達する方法の一つとして合理的避妊法を行ふべきものであると信ずる點等に於て、私は新マルサス主義の精神に共鳴して居るのである。

我國の文化が未だ充分に開發して居ない結果、其特徴である出産と死亡率の大な

ることによりて起る害惡の爲に我國民は甚しく悩まされて居る。樂しかるべき結婚生活に恐ろしい悲哀が伴ふたり、男女合力の爲に能力増進すべき結婚生活に入つて却つて進取の氣性を失ふて無能力の生活を營むが如き不自然な現象が、我國で著しく見らるゝのは矢張ロントリーの研究で示されて居る通り、大家族即ち時代後れの多産主義の實行の結果が其の有力な原因となつて居ると思ふ。個人及國民生活の能率と幸福の増進の爲に産兒が合理的に制限されねばならぬ時代は已に來て居るのである。

パール博士は近着の科學月刊雜誌で次の様に論じて居る。科學的に産兒を制限しなかつた結果、人口が多くなりすぎた時に、其解決法は二つあつた。一はフランス方法で、二はドイツ方法である。前者は意識的整理法を用ひて、出産率を死亡率と同じ位にして、人口を定着させる。而して凡ての産業發達は、生れ出づる幸運を有した市民の生活標準を高むることに役立たしめる。後者即ちドイツ方法は人口過剰の爲

め食物の欠乏を感じ始めると、外國を征服して必要な生活資料を奪取するのである。而して其の征畧を受くるのは主として産兒制限を行ふて居る國で、出来るならば其の土地を併せて子孫の爲に掠奪せんとする。之が爲には出生率の高いことが最も必要である。

軍國主義の勢力を占めて居つた古い時代では勿論ドイツ方法即ち戦争手段が時代に適したもので、平和手段を取つたフランス方法は憐れなものであつた。然るに歐洲大戦争に依つて、ドイツ方法の破滅と共に世界の思潮は根本的に變化した。最早世界は戦亂の打撃を繰返すことを心の眞底から嫌ふて居る。かゝる時代に生を受けたものは最善の努力を盡して世界平和時代が完全に實現されるやうに、軍國主義や多産主義を此の地上から永久に葬り去るべきである。而して新マルサス主義の根本思想は之が爲に有効な力を有するものと考へる。議論は別として我國の實際に就て之を見るに、我國でも已に生理的に社會的に將又經濟的に産兒制限は少なくとも無意識

的に行はれ始めて、大正三年の出生率三三・七を最高限度として、其後は漸次低下して居るのである。時代後れの頑愚者がどんなに反對しても世界文化の大勢には如何ともする事が出来ないのは當然である。

斯かる時勢に處して、若し眞面目になつて産兒制限論の科學的研究を進めないで、徒らに自然の成行に任せて無意識に制限を行ふて居る場合には、他動的に不利益な制裁を受けたり、不合理で有害な制限法が實行されて、個人及社會生活の健全な發達を害することが少くないであらう。

一個の力弱い婦人が愛らしい子供を連れて來朝すると云ふ報を得て、政府當局の一部の人が旅行券の裏書を拒絶したり、俺の眼の黒い間は上陸させるものかと、云ふたとか云はなかつたとか大騒ぎして、サンガー夫人を恐れて居るのは何と云ふ見苦しい愚な事であらう。かゝる方面の知識や經驗に缺乏して居る國民は大に彼女を歓迎して、其の主張を聞き、夫れを此の世界的時代問題研究の資料に供すべきであ

る。勿論彼女の主張の全部を鵜呑にせよと云ふのでないが、かゝる好機會を有利に國民に利用させて、出来るだけ見聞を廣くさせるのは、文明人の特權であり又政府當局の責務である。去りながら丁度森戸事件でクロバトキン研究が案外廣く行はれたと同様に、サンガー夫人上陸事件によりて、彼女の來朝が一層社會の注意をひき起し、新マルサス主義教育の好機會が——假令怪我の功名であつても——政府當局に依つて第一に與へられた事を、我文化進歩の爲に悦ぶ。而して主義の爲に又人類解放の爲に萬難を排して奮闘せる勇者サンガー夫人に敬意を表すると同時に、彼女が能く我國情、風俗、習慣等を斟酌して合理的方法に依て我國民啓發の大任を全ふされん事を世界文化の爲に切望して止まない次第である。

(一九二二・三・一〇サンガー夫人來朝の日)

一〇 女性美と社會美

現代社會に於ける人の一生は、奮闘生活の連鎖劇の感がある、夫れも其筈、此安定して居る様に見ゆる地球其物が、實は最大急行列車以上の速力で、太陽の周圍を駆け回つて回轉して居るのであるから、其表面に棲息して居るすべての人類は、體內に血液が流れて呼吸を續けて居る間は、一時も靜止し得ないのである。實に活動は人の生命で、我等の持つて生れた運命は、奮闘の生涯を樂む可き事である。

働かない者は喰ふべからずと云ふ事は、病者、老幼弱者を除いた、全人類に適用す可き原則であるのに、現代社會の經濟組織は、資本家や特殊特權階級者に限り、働かないでも豊かな所得をうけて、奢侈生活を營む事を許して居る、だから、正直に働いて居る精神的及肉體的勞働者は一層多忙な奮闘生活を送らねばならぬ、而して

資本主義經濟學者は、是れ實に自然法則の然らしむる處で、人力の如何ともすべからざる事であると説いて居る。

現代社會では確に我等勞働者は、二重の勞働を強ひられて居る、一は自分の生活に必要なものを作る爲めにする勞働、即ち必要勞働、二は夫れ以外に社會が必要とする餘分の勞働、即ち餘剩勞働、是れである、而かも勞働者は幾ら熱心に稼いでも餘剩勞働に對する報酬の大部分は資本家に奪ひ去られる様に出來て居る。従つて現在の組織や制度が存在して居る間は、國民の大多數は、人生の惡戰苦闘に終生従事するより致方はないのである。是れが改造されない社會に於て正直に働く人を支配する運命なのである。

二

斯かる運命に支配されるのであるから、美はしい社會に美はしい一生を送りたいと云ふ自然的欲求を追うて行く人生にも、兎角月にむら雲花に嵐の歎聲は起らざる

を得ない、夫れで知識ある者は、經濟的に奮闘生活を送る事によつて、斯かる運命の束縛を脱して、生くるの樂みを味はんとし、苦痛の伴ふ犠牲を出來るだけ少くして最大の效果を得んとする様に、努力するのは當然の事である、而して、夫れが經濟生活の特徴なのである。

云ふ迄もなく奮闘生活には幾多の苦しい勞働が伴うて來るのであるが、其處に動的美が靜的美以上に輝いて、生活を美化し得るのである。而して美化された奮闘生活は國民の大多數によつて營まれる時に、社會美は自然に完成される、斯くの如くにして奮闘生活は安逸生活以上に美はしいものである素質を有して居るのである。

さて奮闘生活の特徴である、最少の苦痛で、最大の効果を納めんとする經濟主義を適用するに必要な條件は種々あるが、其根本義としては、生活に必要な活動を凡て遊戯化する事にある、勞働を遊戯化すると云ふ事は、實際問題として考へると、随分至難の業であるが、理論的に考へると至つて容易な事である。元來勞働も遊

戯も共に、心身の活動で外見何の相違もないのである。娘子が月の夜にムーソライト・ソナタを弾じて自ら楽しんで居る動作も、音楽教師が同じ曲を教へて生活資料を儲けて居る動作も、其活動に於ては何等の差別を付ける事は出来ない、然るに、普通の場合前者は楽しみの伴ふ遊戯で、後者は苦しみの伴ふ労働であるのは何故であらう。

是れは目的の置き處が異つて居るからである。即ち目的が活動の内にある場合には遊戯で、外にある時は労働となるのが本則である、名月に照らされて樂を奏するのは奏樂其物が目的で其行爲と合致して居るが、パンの爲めに音樂を教へる場合は奏樂の行爲は報酬を受けんとする目的を達する手段であるから、目的が行爲の外に存在して居る、而して目的が行爲と合致して居ると苦痛は生じないが、目的が行爲を離るれば離るゝ程苦痛は大になるものである。

今若し精神的修養の結果人生の目的が非常に高尚なものである事を自覺して、其

目的によつて日常の生活行爲が支配さるゝ様になるならば、目的が行爲の中に入る様になるから、生活は遊戯化して楽しいものになる、要するに心の持方一つで、苦痛の多い奮闘生活も是れを笑うて送る事が出来る。そして其時には生活の諸相は全然一變して、社會美は實現されるに至る、乍併、斯る心的改造によつて起る社會美の實現を、一般民衆に要求するのは洵に難い事である。

三

夫れで茲に考へたいのは、もつと手近な實際問題として、女性美の發揮によつて社會を美化せんとする事である。

今日の我國社會は何と云ふ穢ない醜い事が多いのであらう、満鐵、東京市等に續出した不正事件に對する國民の義憤が未だ癒えない中に更に最近の事實としては、神聖な議會に於て、不眞面目で無責任極る言論が弄ばれたり、或は流血を見るが如き蠻行が繰返へされて我が議會政治を汚してゐる、斯かる政治生活の醜體は云はず

もがな、國民生活の花である可き社會生活や、其根本である家族生活に於て是れを見ても、頗る野蠻的な事實の多いには驚かざるを得ない、例へば我國には十七萬の藝娼妓が堂々と職業を得て、流行の藝妓の収入の如きは國務大臣以上であると云ふ事、或は國民の模範たる可き大實業家又高位高官の人でさへ、何の臆面もなく待合通ひをしたり、著妾を行つたり、二枚舌を用ひたりして、恥ぢない者の少くないと云ふ様な事實は、我社會及家庭生活に非常な缺陷のある事を雄辯に語つて居るのであるまいか、虚榮、浪費、卑俗、義理、情實等の囚はれである宴會其他の社交状態を見る時に、實に不快の感を起さずには居られないのである。

斯くの如き缺陷を補ふには男女共力して努力を盡さねばならんのは勿論であるが、私は近來漸く解放され始めた女人の偉力の發動によつて、社會生活は立派に美化される事を信じて疑はないものである。顧みるに今日迄の我文化は、主として男性の力によつて出來たのである、併し男女兩性からなつて居る社會の事であるから、

矢張社會生活は男女協力に依らねば完成の域に達し得らるゝ筈はない。女子を高等女中又は玩弄物として、時代後れの陋屋内に押し込めて居る間は、其社會生活は不具で今日の様に行き詰まつたものになるのは止むを得ない事である、男子が「女人禁制」の標札を各方面から除去して彼等の人格の自由平等を尊重し、男女共働及共樂の美しい社會を建設す可き時は來たのである、而して女子も亦急に解放された社會生活に感亂されて「男人禁制」的の偏狭で突飛な新婦人運動を起すが如き愚をなさずして、特に女子に與へられた社會生活の美はしい半面に於て最善の努力を爲す可きである。斯くの如く男女互に異性として天與の本分を忠實に發揮して兩者が合理的に調和を保ち得た時に、眞の社會美の表現を見る事が出来るのである。

四

『男子は働く可く、婦人は泣く可し』(Man must work and woman must weep) と云ふたのは昔の事で今日では、婦人は泣くのを止めて是れを微笑に更へなければな

らなす。(Man must work and woman must smile)

甚だしく穢くなつた社會を美化するには多くの方法があるが、女の微笑ほど偉力を有するものは少くない、此點に於て私共男性は兜を脱いて女子に尊敬の意を表さなければならぬ、美を愛し醜を好まざるは人の天性である。而して女人の特性は美を護る事にある。但し美は神性を有して居るから、是れが自然に現れた時は、*"To me the mearest flower that blows can give thoughts that do often lie too deep for thought."*とウオルヅウオルスを歌はしめたり又はローエルをして「何故かは知らないが今や悦び來り悲み去り萬物は幸福である、かゝる時には、草が青く空が碧い様に人の心も誠實である事はたやすい。——是れ實に活けるものゝ自然の道である。

Joy comes, grief goes, we know not;

Everything is happy now,

Everything is upward striving;

'T is as easy now for the heart to be true

As for grass to be green or skies to be blue,

'T is the natural way of living;

而して夫れと同じ美が人其物に現はれた時に、男子にとつては女性美となつて驚く可き「惹き着ける力」が其處に湧出するのである、此女性美の力は絶對的に男の力の及ばない處に盛んに働いて生活は各方面に美化し得られ、行き詰まつて醜態を演じて居る社會は此美の活動によつて一層深みのあるものに開展され得るのである、而して美は女性の生命であるから若し女子にして此美を十分に發揮し得ないとするならば、彼は社會的に存在の意義を有して居ないのである。

五

女性美には肉體的のものと精神的のものと二種類が存在して居るのであるから、俗に肉體美のみを女性美と認めて居るのは大なる誤りである、又肉體美でも單に顔

面のみの美貌のみを云ふのではなく、美はしい容姿、美はしい手足、美はしい毛髪、美はしい動作、美はしい音聲等も皆大切な肉體美の要素である。

是等の肉體美も社會を美化するに必要な事は勿論であるから、女子が適度に化粧其他の方法で自己の與へられた美を最高限度に發揮せんとするのは寧ろ獎勵す可きことである、去りながら女子は、男子の想像以上に此肉體美を重大視して居るのが普通である様であるが、是よりも遙かに大切で又有力な女性美のある事を忘るゝならば却つて其肉體美さへをも減損せしむるに至るのである。即ち女性美の美は肉體美の外に精神美即ち心の美はしい事が具はる事に依つて初めて全うされるのである、幾多の實例が示して居る事であるが肉體美が勝れて居なくとも、男子の目に非常に美しく見える女性が少くないと同時に、肉體美が如何に勝れて居つても何等惹き付ける力を有して居ない女が多いのである。是れ皆心の美は容姿の美以上に力強い事を證明して居る。

勝れた肉體美を持つて生れた人は確かに幸福な人であらうが、夫れが爲め虛榮心等が一層煽り立てられて心の美を傷ける事により、不幸な一生を送る人が數多いと云ふ事は實に惜む可きである。是れに反して肉體美に缺點の多い女でも却つて夫れが刺戟となつて、精神の教養を怠らない結果、著しい女性美を發揮し得る女が少なくない、而して如何なる婦人でも或る程度迄は女性としての一種の強力な女性美を先天的に具備してゐる事は明白であるから、所謂醜婦も悲觀する必要はないのである。

エレン・ケイの書いた評傳の主人公である有名なラヘル・バルンハーゲンは普通には醜婦として知られて居るが、私は著しい女性美を立派に具へた人であると思ふ、勿論容貌は次の様に自らも云つて居るのであるから、寧ろ醜かつたのであらう「私は美はしい心、柔かな心臓を持つて生れて來たけれ共、私の容貌が勝れない爲めに、新らしい世に顯はれる事が出來ない」と歎じて居る、去りながら有島武郎氏の

言葉を借りて云ふと「ラヘルは非常に身柄の小さいこまぐ」とした併し如何にも確かりと出来た體格であつて、而して顔の廻りには黄ろい艶々した髪の毛が潤澤に生ひ而して非常に小さい美はしい手と足とを持つて居た女である。而して驚く可き事は其人の目である、其人の目は一種の光を以て輝いて人を見詰める時に其人の肺腑を貫くやうに見え又同時に驚く可きは其人の聲であつて、張りのある而して響の籠つた何とも云へない聲で、其人の話を聞いて居ると何時までも聞かなければ氣の濟まない様な感じがする、其話す言葉はやさしい立派な床し味を持つたものであるけれども、其中には鋼鐵の如き力があつて、假りに人が夫れを動かさうとしても思ひも寄らぬと云ふ感じを興へた」

是等の記述を考へても彼の内部から漲り出でたものによつて其外形的の肉體美が立派に發現して居つた事が想像される、従つて彼は多くの男性の熱烈な戀愛の的となつた、彼れが二十四歳の時に初めて結婚した第一の夫は自分より五歳も年下のカ

ール・フォン・フィンケンスタインと云ふ美貌の青年であり、四十二歳の時に第三回目に強烈な戀愛に陥つた夫は十六歳も年下のバルンハーゲン・フォンエンセと云ふ若い人であつた、而して彼はラヘルが六十一歳で死んだ時まで、十九年間、日に新たな愛情を献げ年がたつ程二人の間の愛は酒の如く熱して行つたのであつた、彼曰く「自分の結婚生活は一日々々に新たな結婚生活を繰り返した様であつた、彼女の傍らに居ると自分は常に新たな愛の燃え出づるのを感じた」

斯かる戀愛を引き起さしめたラヘルは假令容貌に於て勝れて居なかつたけれども、其他の肉體美や心の美はしい事に於て類の少い女性美の持主であつたに相違ない。

勿論女性の肉體美は鬼も十八と云つて居る様に青春の豊麗な肉體に於て最もよく發現されるであらう、けれ共男子が女性から求めんと熱望して止まないものは、女の外形的のものゝみではなく、女性特有の情緒、即ち男性の内には決して見出す可らざる内在的の「心の美」である、この心の美が肉體美で包まれて居る時に女性美は

最高限度に發揮されるのであるが、心の美は容貌美の様に一朝一夕に白粉や頬紅で全うされるものでない、唯長年月に互る修養訓練によりてのみ養成し得る事が出来る、だから艶麗な血肉や美貌の持主である若い女性よりも寧ろ年長の婦人で血肉美は衰へて居つても男性の憧憬れて居る内在的の女性美——心の美——が男子を恍惚たらしむるものがあるのは敢てラヘルの場合に限らない。

餘程以前から歐米に行はれ又我國にも近頃見受けられる事實、即ち男子が自分よりも遙かに高齡の女子に對して、強烈な戀愛關係を結ぶに至る理由は蓋し此處にあるのである、又如何に美貌に誇れる妙齡の藝妓の如きが巧みな化粧術や藝術手段を活用しても、教養ある男性の心を奪ひ得ない理由も此處に存するのであらう。

七

女性美は全然先天的に決定されるものでなく、後天的即ち教育により又訓練によりて得らるゝものが多いのである。而して女性美の基本となるのは、何といつて

も『誠實』の念である。だから誠實な女子ほど美はしい尊い女性はない。誠實といつても必ずしも、むづかしく考へる必要はない。只自然に與へられた天真爛漫の心でありのままに且自由に發現し得る其誠實をいふのである。誠實な女の眼には自然美が輝いて居る。彼の女の口は知らずくのうち自然美をありのままに語る。彼女の微笑は、花よりも美はしく、男子の荒々しい心を溶かす力を有してゐる。だからラヘルはいつて居る。『人は誠實である事が人に健康を與へる。それであるから真理を有つて居ないものは老ゆる。人を老いしむるものは、顔の皺ばかりでない。』と。

私が嘗て大阪公會堂で講演を終へた後、大毎新聞であつたか、大朝であつたか忘れたが一婦人記者から面談を求められてホテルの應接室でいろく話した時に、普通の婦人からはあまり聞かない事を聞いた。彼女曰く『私が此頃最も愉快に思ふ事は、其日の新聞社の用務を終へて歸宅してから、鏡面に立つて容姿をととのへ、晴着を着て出来るだけ自らを美はしくして、美はしい心を持つにつとめる時でありま

す。勿論別に來客を待つのでなく、外出しようとするのでもありません。只母と共に落ちついた心を持つて暮す時の心が愉快でたまりません』と其言語は誠實な動機のある事がよく認められて如何にも美はしく感じた。そして私はいつた。『あなたは何故その美はしい心と、美はしい容姿にあらはれた女性美を單に家屋内に幽閉する事にとめるのですか、其女性美の活用によつて、荒れずさんでゐる大阪の交際場裡を清淨され得るのです。そしてそれが今日の婦人によつて、ぜひなされねばならぬ大切な文化事業であると思ひます』と。

私が我國婦人諸君に今日訴へねばならぬ事はこれと同様の事である。然るにその若い女記者は顔を赤くして何か語らんとして語り得なかつたのであるが、これにつづいて又大なる教訓が存在してゐる事を感じた。即ち活社會に活動してゐる婦人記者でさへ、人の談話を聞いて巧に文章であやをつける事は、自由にするが自ら自分のいはねばならぬ事を男子の前に充分に發表し得ないといふのは、現代婦人の弱點

を示してゐるので誠に惜しむべき事であると思つた。これは全くわが國で長い間歴史的に發達したる不自然な社會生活や女子教育の結果であるから、容易に改善する事はむづかしいが今は一九二二年の社會となつたのであるから今尙男女交際が不自然な束縛を受ける筈はないのである。社會生活が男のみで全うされないのは當然の事であるのに、自然作用ともいふべき、男女交際が、楽しく出来ないやうな社會には、必ずいろ／＼不自然な悪い結果が起るのである。例へば藝者、酌婦の類が我社交界に勢力を有するが如きも當然の事と思ふ。

私はこれら職業婦人を卑下する事の甚だしいものであるが、今日の如く一般女子が進んで女性美を發揮させて社會生活を美化し得ない間は、彼等の存在が或意味において、必要であると考えざるを得ない。彼等が如才なく男子を相手にして巧に女性美を社會生活に混じゆく技倆は、今日所謂良家の婦女子の學ぶべき事ではあるまいか。一般婦人が現在のやうに人前に出ては無口で、陰鬱で無愛想であり爲めに折

角威力を有する自分の女性美を或は言語に或は動作に自由に表現し得ない間は、文化の進んだ社會に於ては、全く無用の長物であるべき藝者の如きが跋扈するのは何も不思議な事ではない。而してその結果として、一方においては、教養ある子女でも彼等の花の舞臺であるべき社會生活から放逐されて、暗黒な家庭の奥に押籠められ、他方においては真正の女性美を愛慕してやまない男子の慾求が満足されない爲に、不正當で不自然な娛樂や慰安が盛に行はれ遂に男子の英氣を萎縮せずにはゐられないのである。

要するに我文化は日に月に進轉してゐるが、いまだ取残された一大文化事業が存在してゐる。それは女性美を通じて社會美を發揮させる事である。實に女性が天興の女性美を最高限度に發揮する事によつて、この行き詰つた社會生活が初めて美化され得る事である。それに對して男女ともに最善の注意を拂ふ事は、刻下の急務である。女性美と社會美が、一層盛に發揮されなければ、能率の多い奮闘生活を長く

續けるには、この社會があまりにきたなく又あれすさんでゐるのである。

然らば進んで女性美を發揮させる爲めに如何なる手段を取つたら善いかといふ問題は、他日これを詳論する事にするが、要するに幼少の時より特に異性に對し、又一般社會生活に對して、必要な實際的の知識と訓練を學校及家庭において、授くる事が根本的に必要であると思ふ。私は米國の幼稚園及び小學校で自分の子供がなるべく男女兩性の調和をはかる事に重きを置いた教育を受けた實驗と、現在我國で普通に行はれてゐる、なるべく異性を別物扱ひにし兎角女性を卑下せんとする傾きのある學校教育法とを比較して一層この念を強くするのである。かゝる問題の解決は單に學校教育ばかりでなく家庭問題及び社會問題として女子も男子も大いに考究して根底から文化の開發を計らねばならぬと思ふ。

一一 看過された經濟原理

今日の經濟社會は餘程眞面目になつて、實業家の常識も大いに發達したのは喜ばしい事である、十七八世紀頃には賣手が買手をだまして損をさせねば利する事が出來ないと云ふ様な事を、商賣の原則と心得て居つたのである、併し今では買手も賣手も双方共に利益を受くる事によりて商業は始めて成立し其發達を來し得るものであると云ふ原理が、明白に證明された。勿論今でもそれが半解され濫用されて、社會奉仕などの流行語を表面に掲げて、内實二三年前の瞞着手段で不當の利を占めんとする時代後れの實業家もないではない。が、かゝる人々は到底新時代の競争場裡に立つて最後の勝を占め得ざる輩である。

如何に現代實業が複雑であつても、其の活動は根本に於ては一定の原理によつて

支配されて居る、故に實業の進歩發達を來さんとするならば、必ず社會進化の示す眞理を經濟生活に適用しなければならぬ。是自明の理で何も彼は論議する餘地がないかの如くであるが、不思議な事には極く普通の根本問題に於て、此の眞理が闕却され爲に經濟進歩が著しく阻害されて居る事實を認むるのである。今少しく此の看過された問題を論述して識者の注意を促し、以て經濟進歩の根底を鞏固にせんとするのである。

二

今から約五十萬年前の大昔に、人ともつかず猿ともつかない四足動物が、地球の主人公と云ふ格で盛に棲息して居つた。専門家は是をプロリオスピカスと稱して私共人類と、猿類との共通の先祖であると云つて居る。此動物は終始四つ這ひになつて居るのが常であつたが、其中に特に賢い者が出來て二本の前肢を多く使用する習慣を有して居つた。絶えず前肢を動かすと自然後肢のみで身體を支へる必要が起り

其結果半ば直立の形で稍長時間歩行するのが常習となつた。斯くなつたのは大した進化で、此動物こそ實に猿人と稱する一番初めの人類なのである。

人類が他動物よりも優勢なものになつた第一の理由は、二本足で歩行し得る様になつたが爲に二本の前肢が手になつて是を自由に使ひ得る様になつた事である。故に手が自由になると利益かと云ふに、夫れは其手で人力を助くる道具を用ひて人の能力を大にし、種々の點で活動の範圍が大になるからである。活動が盛になれば次第に知識が増進し、更に有効なる活動の範圍が大になる。

而して手の發達と共に五指が能く動く様になり、一層精巧な機械が使用さるゝ様になる。實に人は道具なくしては無能であるが、道具さへ用ふれば萬能になるのである。今日の様に人の社會が發達したのは全く機械利用の結果である事を考ふるならば、現代經濟界で最も大切な資本は人力を動力とする道具と、夫れが一層進歩して水力、風力、蒸気力電氣力等の自然力を動力とする機械である事は明かな事實で

ある。生産の要素として資本が甚だしく有効である理由は、機械化した資本の利用によりて人の生産能力を十倍又は數十倍になし得るからである。かゝる事實は實業に従事して居る者は勿論の事、經濟學の初歩を學んだ者でさへ第一に着目する普通の原理で、資本主義の盛な今日では周知の事、即ち世人の常識となつて居る筈のものである。

三

資本の勢力は餘りに大であるから、一度其運用を誤まる時には種々の弊害が發生するものである事も亦今日多くの事實が證明して居る。近來盛に資本主義に反對の聲を擧げて居る社會主義者でも、資本の勢力の大なる事實は認むるのである。故に彼等は生産資本を悉く個人の私有から社會の共有に移し、以て機械利用の結果勞働者の受くる生産の餘剰を今日の如く資本家のみに壟斷せしめざらんと努力して居るのである。如何なる人でも——個人主義者でも社會主義者でも——生産の實を十分